

◎状態動詞

be 動詞 (～である) **keep** (ずっと～である) **lie** (～の状態にある)
remain (～のままている) **sit** (～の状態である) **stay** (～のままている)

◎変化動詞

become (～になる) **get** (～になる) **grow** (次第に～になる)
turn (～になる[変わる])

③go (行く) と come (来る) → 「～になる」で SVC となる

go→好ましくない come→好ましい

◎知覚動詞

look (～に見える) **seem** (～に思える) **appear** (～に見える)
feel (～の感じがする) **smell** (～のにおいがする) **sound** (～に聞こえる)
taste (～の味がする)

文型		意味	動詞
第1文型	SV	Sは～する	自動詞 (目的語不要)
第2文型	SVC (S=C)	SはCである	
第3文型	SVO	SはOを～する	他動詞 (目的語必要)
第4文型	SVO (人) O (物)	SはOにOを～する	
第5文型	SVOC (O=C)	SはOをCにする	

◎第4文型 SVOO

give+O+O型: 自分が持っているものや情報を他の人に届ける (to)

give (与える) **show** (見せる) **tell** (話す) **teach** (教える)
lend (貸す) **send** (送る) **pay** (支払う) **pass[hand]** (手渡す)

buy+O+O型: 他の人のために何か利益になることをしてあげる (for)

buy (買う) **find** (見つけてやる) **make** (作ってやる)
choose (選んでやる) **cook** (料理してやる)
get (手に入れてやる) **call** (呼んでやる) **leave** (残しておく)

③take (AにB[時間・労力]がかかる) と cost (AにB[費用]がかかる)

→×SVO+前置詞+A

④ask+O+O →ask+O+of A (favor や question)

save+O+O型

cause A B (AにBをもたらす) **owe A B** (AにBを借りている)
save A B (AのBを省く) **spare A B** (AにBを割く)

◎第5文型 SVOC

make+O+C型: OをCにする **make/get** (～にする) **paint** (～に塗る)

keep+O+C型: OをCのままにする

keep (～の状態にしておく) **leave** (～のままにしておく)

call+O+C型: OをCと呼ぶ

call (～と呼ぶ) name (～と名付ける) elect (～に選ぶ)

think+O+C 型：O を C と思う

think[consider] (～と思う) believe (～と信じる) find (～だとわかる)

③regard, see, view (～と見なす[思う]) → ×SVOC → SVO + as～

◎郡動詞 動詞＋副詞・前置詞

自動詞の働き：目的語不要

他動詞の働き：目的語必要

④動詞＋副詞の目的語が代名詞 → 動詞＋代名詞＋副詞

目的語が短い名詞 → 動詞＋名詞＋副詞

◎他動詞 前置詞は不要

approach a town (街に近づく) attend a meeting (会議に出席する)

discuss it (それについて議論する) enter a room (部屋に入る)

marry him (彼と結婚する) mention it (それについて話す)

reach the station (駅に到着する) resemble her (彼女に似ている)

◎自動詞 前置詞が必要

agree with you (あなたに賛成する)

apologize for the delay (遅くなったことを謝る) apologize to her (彼女に謝る)

graduate from college (大学を卒業する) object to a plan (計画に反対する)

◎自動詞と他動詞の活用

自 lie (横になる)	lay	lain	lying
他 lay (～を横たえる)	laid	laid	laying
自 lie (嘘をつく)	lied	lied	lying

自 rise (上がる)	rose	risen	rising
他 raise (～を上げる)	raised	raised	raising

動詞の語法

◎「話す」「言う」

基本は自動詞	speak	自動詞	speak (話す、演説する) speak to[with] A (A に話しかける、A と話をする) speak about[of] A (A について話す)
		他動詞	speak A (A[言語]を話す)
	talk	自動詞	talk (話す) =speak talk to[with] A (A と話をする) talk about[of] A (A について話す)
		他動詞	talk A into doing (A を説得して～させる) talk A out of doing

			(Aを説得して～することをやめさせる)
基本は他動詞	say	目的語に人以外	say A (to B) ([Bに]Aと言う) say (to B) that ([Bに]…と言う)
	tell	目的語に人	tell A B (AにBを伝える) = tell B to A tell A that ...[wh-節...] (Aに…だと話す) tell A about B (BのことについてAに話す) tell A to do (Aに～するように言う)

◎「借りる」「貸す」

借りる	borrow A (from B) 「(Bから)Aを借りる」
	use A 「A(電話やトイレなど)を(その場で)借りる」
貸す	lend A B = lend B to A 「A(人)にBを貸す」
借りる・貸す	rent A 「Aを(有料で)借りる[貸す]」

◎「似合う」「合う」

似合う	人に似合う	suit A	「(服・色などが)A(人)に似合う」
		become A	
	物に似合う	go with A	「(服・色などが)A(物)に似合う」
		match A	
合う	寸法が合う	fit A	「(サイズが)A(人・物)に合う」
		agree with A	「(食べ物・気候などが)A(人)の体質に合う」→否定文に使われる

◎「書く」「描く」

write A 「A(文字・名前・手紙など)を書く」

draw A 「(線で)A(絵など)を描く」

paint A 「(絵の具で)A(絵など)を描く」

◎「疑う」

doubt that ... 「…であることを疑う、…ではないと思う」

doubt if [whether] ... 「…かどうか疑問に思う」

suspect that ... 「…ではないかと疑う、…だと思う」

◎hope の用法

hope for A 「Aを望む」 hope to do 「～することを望む」

hope for A to do 「A(人)が～することを望む」

hope that ... 「…であることを望む」

◎help の用法

help A with B 「A(人)のBを手伝う」

help (to) do 「～するのを手伝う」

help A (to) do 「A(人)が～するのを手伝う」

help oneself (to A) 「(A を)自分で取って食べる」

◎意外な意味を表す自動詞

cut 「切れる」 do 「間に合う」 hold 「もちこたえる」

last 「続く、もちこたえる」 matter [count] 「重要である」

pay 「割に合う」 read [say] 「書いてある、解釈できる」

sell 「(商品などが)売れる」 (well, badlyなどを伴う)」

◎意外な意味を表す他動詞

cover 「(費用など)をまかなう、～を報道する、(距離)に行く」

meet 「(要求・必要)を満たす」

miss 「～がいなくて寂しく思う、～に乗り遅れる、～をし損なう、～を免れる」

move [touch] 「～を感動させる」

stand 「～を我慢する」

◎SVOO で使われる do

do A good 「A のためになる」 = do good to A

do A harm 「A の害になる」 = do harm to A

do A damage 「A に損害を与える」 = do damage to A

do A a favor 「A の頼みを聞く」

◎SVO+for+名詞「原因・理由を表す for」

blame A for B 「A(人)を B(過失など)のことで非難する」

excuse [forgive] A for B 「A(人)を B(過失など)のことで許す」

praise A for B 「A(人)を B のことでほめる」

punish A for B 「A(人)を B(罪など)のことで罰する」

thank A for B 「A(人)に B のことでお礼を言う」

◎SVO+ of+名詞「関連を表す of」「除去を表す of」

accuse A of B 「A(人)を B(誤った行為など)のことで非難する」

convince [persuade] A of B 「A(人)に B のことを納得させる」

inform A of B 「A(人)に B のことを知らせる」

remind A of B 「A(人)に B のことを思い出させる」

suspect A of B 「A(人)に B(罪など)の嫌疑をかける」

warn A of B 「A(人)に B を警告する」

clear [rid] A of B 「A(場所)から B(障害物など)を取り除く」

cure A of B 「A(患者)から B(病気)を取り除いて治す」

relieve A of B 「A(人)から B(重荷・責任など)を取り除く」

rob [deprive] A of B 「A(人)から B(物・能力など)を奪う」

◎SVO+with+名詞

present A with B 「A(人)に B(物)を贈る」 =present B to A
provide A with B 「A(人)に B(必要なもの)を供給する」 =provide B for A
supply A with B 「A(人)に B (必要なもの)を供給する」 =supply B to A
cover A with B 「A を B で覆いつくす」
fill A with B 「A を B で満たす」
associate A with B 「A を B と結びつけて考える」
identify A with B 「A を B と同じものとして考える」
share A with B 「A(物)を B(人)と共有する」

◎SVO+to+名詞

attribute A to B 「A(功績・結果など)を B に帰する、A を B のせいと考える」
bring A to B 「A を B に連れてくる、A を B に持ってくる」
leave A to B 「A(物・事)を B に任せる」
owe A to B
「A(物・事)は B(物・事・人)の恩恵をこうむっている、A は B のおかげである」
take A to B 「A(人)を B(場所)に連れていく」

◎SVO+into+名詞

divide A into B 「A を B に分割する」
translate A into B 「A を B に翻訳する」
turn [change A into B 「A を B に変える」

◎SVO +from+名詞

derive A from B 「A を B から引き出す」
distinguish [tell] A from B 「A と B を区別する」
order A from B 「A を B に注文する」

時制

◎頻度を表す副詞

always (いつも) never (一度も~ない) almost always (ほとんどいつも)
every day (毎日) usually (たいてい) every week (毎週)
often (よく) every Sunday (毎週日曜日) sometimes (ときどき)
twice a week (週に 2 回) seldom / rarely (めったに~ない)

◎現在形

㊦過去・現在・未来を通じて変わることのない**事実や真理**

㊦**時・条件を表す副詞節**の中は現在形を用いる ×will

時や条件を表す副詞節を導く接続詞

when (～する時) until[till] (～するまで) before (～する前に)
after (～した後) by the time (～する時まで)
(the) next time (次に～する時) as soon as (～するとすぐに)
if (もし～ならば) unless (もし～でなければ)

in case (～する場合に備えて/～するといけないから)

◎進行形

現在進行形：動作動詞のみ ×状態動詞

ある期間に繰り返されている動作→期間を表すしゅみ：all day (一日中)

these day (最近) this week (今週) this month (今月) を伴う

㊤進行形→丁寧な表現に→過去進行形にするとさらに丁寧に

過去進行形

1. 過去のある時点の動作

2. 過去のある期間の繰り返し→期間を表す副詞を伴う

㊤always などの頻度を表す副詞を伴う→何度も繰り返される動作「いつも～してばかりいる」 (話し手の不平不満)

become, get, grow の進行形→変化の途中「～になりかける」

begin, close, die (瞬間的な出来事を表す) の進行形→「～しかけている」

◎過去形(動作動詞)

1. 過去の1回きりの動作や出来事→yesterday (昨日) last week (先週)

last month (先月) を伴う

㊤現在形→現在の習慣：ある一点は表せない

2. 過去の習慣・反復動作→頻度を表す副詞を伴う

㊤助動詞 would/used to を使って過去の習慣を表すこともできる

◎未来

will：未来の予測 (～だろう) →単純未来

未来の意思 (～するつもりだ) →未来意思

㊤Will you...? →相手の意思を尋ねる・依頼

be going to：前から予定していること (～する予定だ)

㊤その場で決めたこと→will

近い未来の予測 ([状況から判断して]～しそうだ)

㊤未来の事柄について、準備が進んでいる→現在進行形

過去のある時点から見た未来の予定・計画→過去進行形

㊤be going to go[come]→(口語) be going, be coming

現時点で確定している未来の予定 (変更の可能性が低い) →現在形

go, come, leave, arrive などの往来・発着を表す動詞が使われる

そのほかの表現

be about to do 「まさに～しようとしている」→be going to do より差し迫る

be 動詞+to 不定詞 「～することになっている」→公式の予定

◎未来進行形

1. 未来のある時点で行われているであろう動作

2. 確定している未来の予定 (～することになっている)

④Will you be doing...? →相手の計画や意思を丁寧に尋ねる

動作動詞と状態動詞

動作動詞(動作を表す動詞)→**進行形にできる** 動作や行為を表す(～する)

play(～する) eat(食べる) go(行く)など

状態動詞(状態を表す動詞)→**進行形にできない**

ある状態が続いていることを表す(～である、～している)

①継続的状态を表す動詞

be 動詞(～である) **belong** (所属する) **have** (持っている)

own (所有している) **possess** (所有している) **resemble** (似ている)

depend (頼る) **contain** (含む) **consist** (成り立っている)

exist (存在する) **owe** ([金・代金]を借りている)など

④「**持っている**」という意味の have→×進行形、「**食べる**」の意味→○進行形

④resemble は more and more などを伴って経過を表す→○進行形

②心理・思考を表す動詞

like (好きである) **love** (愛する) **hate** (嫌う) **think** (思う) **believe** (信じる) **know** (知っている)

understand (理解する) **remember** (覚えている)

③知覚・感覚を表す動詞

see (見える) **hear** (聞こえる) **smell** (においがする)

taste (味がする) **feel**(感じがする)など

④動作を表す場合は進行形にできる

④look, watch, listen 「(意識的に)見る、聴く」→動作動詞→○進行形

see, hear 「(意識せずとも)見える、聞こえる」→状態動詞→×進行形

④「一時的な状態」を強調する進行形

「**一時的な状態**」を表す状態動詞→○進行形

完了形

◎完了・結果

動作・行為の完了とその結果が生じた現在の状況

「(今) ～したところだ」「～してしまって…だ」

一緒に使われる語句：**just** (ちょうど) **already** (すでに、もう)

yet ([疑問文]もう、[肯定文]まだ)

◎経験

現在までの経験「(今までに) ～したことがある」

一緒に使われる語句(回数・頻度)：**once** (1度、かつて) **twice** (2度)

three times (3度) **before** (以前に) **ever** ([疑問文]今までに)

never (1度も～ない)

④口語：**ever, never**+過去形→経験

◎状態の継続「(今まで) ずっと～である」→**状態動詞**

一緒に使われる語句：**for** (～の間) **since** (～以来)

How long...? (どのくらいの間…)

④for→期間 since→過去の一点から

④「～して○年になる」

祖父が亡くなって5年になる。 My grandfather has been dead for five years.

=My grandfather died five years ago. 「5年前に亡くなった」と考え

=Five years have passed since my grandfather died.

「(今で)5年が過ぎた」と考え

=It has been five years since my grandfather died. 「～以来(今で15年だ)」

=It is five years since my grandfather died. 上のを現在形に

◎現在完了進行形

現在までの動作の継続→動作動詞

have been doing 「(今まで)ずっと～し続けている」

⑤現在完了進行形→継続を強調、未来への継続

◎現在完了形の語句

使える: ever (今までに) lately (最近) before (以前に) since ~ (～以来)

now (たった今) recently (最近) so far (今までのところ)

for ~ (～の間) up to now (今まで) just (ちょうど)

⑥just now(つい先ほど、ちょうど今)→過去形あるいは現在形

現在完了形の文での使用は避ける。

使えない(過去形とともに使う): ~ago (～前) last month (先月)

last year (昨年) in 2010 (2010年に) in those days (当時)

When ~? (いつ～したか) What time ~? (何時に～したか)

yesterday (昨日) last week (先週)

⑦since last ~は現在完了形と一緒に使うことができる

◎「最近」「近ごろ」を表す語

	現在完了形	過去形	現在形・現在進行形
lately	○	△(まれ)	△(まれ)
recently	○	○	×
these days	△(まれ)	×	○
nowadays	△(まれ)	×	○

◎過去完了形: 完了・結果「(過去のある時点までに)～してしまっていた」

経験「(過去のある時点までに)～したことがあった」

継続「(過去のある時点まで)ずっと～だった」→状態動詞

◎過去完了進行形: 動作の継続→動作動詞

had been doing 「(過去のある時点まで)ずっと～し続けていた」

◎大過去

「先に起こった出来事」→過去完了形にする

⑧過去に起こった出来事を順に述べる→過去形

時を表す after , before を用いる→過去形

◎未来完了形：完了・結果「(未来のある時点までには) ~しているだろう」

経験「(未来のある時点までに) ~したことになるだろう」

継続→状態動詞

「(未来のある時点までに) ずっと~していることになるだろう」

◎未来完了進行形→動作動詞 (未来完了形で表すことが多い)

「(未来のある時点まで) ずっと~し続けているだろう」

◎未来完了形の代用

1. 時や条件を表す副詞節のなか→×未来完了形 ○現在完了形
2. 現在完了形→意味合いの強調、未来に起こることの強調

時制の一致

1. 従属節の動詞が過去形や過去完了形になる

(1) I think (that) she is angry. 彼女は怒っていると思う

(2) I thought (that) she was angry. 彼女は怒っていたと思った。

主節 従属節

× I thought (that) she is angry.

日本語ではどちらも「怒っている」と表現するが、英語では thought になると、is も過去形の was になる。

2. 主節の動詞が現在形るとき→時制の一致は行わない

従属節の動詞の時制は、その出来事が起こった時に合わせる。

⑬主節が現在完了形や未来の場合も時制の一致は行わない。

3. 主節の動詞が過去形るとき→時制の一致を行う

従属節の動詞を主節に一致させる(過去にずらす)。

(1)現在形→過去形

I think (that) she **is** angry. (彼女は怒っていると思う。)

I thought (that) she **was** angry. (彼女は怒っていたと思った)

(2)過去形→過去完了形

I think (that) she **was** angry. (彼女は怒っていたと思う。)

I thought (that) she **had been** angry. (彼女は怒っていたと思った。)

⑬時の関係が明らかな場合は過去形のままでもよい

(3) will → would (過去形)

I think (that) she **will** be angry. (彼女は怒ると思う。)

I thought (that) she **would** be angry. (彼女は怒ると思った。)

⑬従属節の動詞が should や過去形のない助動詞(must, ought to, had better, need) →過去にずらすことができないのでそのままの形を使う

I think I **must be** careful. (気を付けなければならないと思う。)

I thought I **must be** careful. (気を付けなければならないと思った。)

(4)現在進行形→過去進行形

I think (that) she **is** sleeping. (彼女は眠っていると思う。)

I thought (that) she **was** sleeping. (彼女は眠っていたと思った)

(5)過去進行形→過去完了進行形

I think (that) he **was** swimming. (彼は泳いでいたのだと思う。)

I thought (that) he **had been** swimming. (彼は泳いでいたのだと思った。)

(6)現在完了形→過去完了形：過去形・現在完了形→過去完了形

I think (that) they **have known** each other. (彼らは知り合いだと思う。)

I thought (that) they **had known** each other. (彼らは知り合いだと思った)

◎過去完了形→過去完了形：従属節が過去完了形の場合は、主節が現在形→過去形：従属節は変化しない。

4. 時制の一致を行わない

「時の流れに関係のない内容を述べる場合」→主節の動詞が過去形でも時制の一致を行わない。

①変わらない真理・ことわざ(従属節の動詞は現在形のまま)

②現在の事実・習慣(従属節の動詞は現在形のまま)

③歴史上の事実(従属節の動詞は過去形のまま)

④仮定法(仮定法は主節の時制の変化による影響を受けない)

助動詞

助動詞	意味①	意味②
can/could	能力・可能(= be able to) ~することができる	推量(可能性) ~はあり得る
may/might	許可 ~してもよい	推量 ~かもしれない
must	義務・必要(= have to) ~しなければならない	推量(確信) ~に違いない
should	義務・助言(= ought to) ~すべきだ, ~したほうがよい	推量 ~のはずだ
will/would	意志 ~するつもりだ	推量 ~だろう

助動詞の基本的なルール

①助動詞の後には動詞の**原形**がくる。

②主語の人称や数によって**変化しない**

③否定文は助動詞の後に not を付ける。

④疑問文は主語の前に助動詞を置く

⑤**2つの助動詞**を並べることはできない。

◎can

能力・可能「~**ことができる** (能力がある)」

過去形→could「~**ことができた**」

未来・完了形→be able to do

許可「~**してもよい**」→否定：不許可・禁止

Could I ~? 「~**してもいいですか**」

依頼「~**してくれますか**[**いただけますか**]」

推量「～はあり得る」→可能性

疑問：「～はあり得るだろうか」→強い疑い

否定：「～のはずがない」→不可能性

⑥can't ⇔ must

◎may

許可「～してもよい」→否定：不許可・禁止

May I ~? 「～してもよろしいですか」

⑦can→may より口語的・日常的

may→堅い表現、目上の者が目下の者に許可を与える、目下の者が目上の者に許可を求める

くだけた言い方：It is all right if I ...?

⑧May I ~? / Can I ~? の返答

いいですよ Yes, of course. Yes, you can. Sure. All right. Certainly.

Go ahead. Why not?

いいえ、だめです I'm sorry you can't. No, you can't. I'm afraid you can't.

I'm afraid not.

⑨Yes, you may. /No, you may not.は目上の者が目下の者に許可を与えるとき

⑩許可の意味の may→次に動作動詞

可能性・推量の意味の may→次に状態動詞

推量「～かもしれない」→否定：「～でないかもしれない」

might : 「(ひょっとすると) ~かもしれない」→確信度の低い推量

⑪強い否定的推量→can't 「～であるはずがない」

May S+V →希望・願望「S が～しますように」

◎助動詞の過去形

助動詞の過去形は必ずしも過去の出来事を表すわけではない。形は「過去」だが現在の意味を表す場合も多い

●確信度を下げる過去形

推量を表す表現で、can, may, will の代わりに could, might, would を使うと、確信度が低い、控えめな推量になる。

過去形(might)を使った文は仮定法の文。「実際には違うかもしれないのです

が」というニュアンスを含む控えめな表現になる。

●丁寧表現と過去形

「依頼」の表現で、can や will の代わりに could, would を使う→丁寧な言い方

過去形(could, would)を使った文は仮定法の文。「実際には難しいと思うのですが」と断られることを前提にした丁寧な依頼表現になる。

◎must

義務・必要「～しなければならない」

→「(話し手が主観的に) ~しなければならない」と感じている場合

⑫You must ...? 「ぜひ～してください」という強い勧めを表す

禁止 must not 「～してはいけない」

◎have to do

have to do 「～しなければならない」→客観的に見て、行う必要がある場合

③口語で have to do =have got to do

don't have to do：不必要「～する必要はない、～しなくてもよい」

④must⇔don't have to do （～する必要はない）

must not （～してはいけない）

◎過去や未来における義務・必要

過去や未来の義務・必要→have to do

[過去] I had to wait for two hours. （私は2時間待たなければならなかった）

[未来] You will have to wait long. （長く待たなければならいでしょう）

[他の助動詞] You may have to wait long.

（長く待たなければならいかもしれない）

③誘いなどを断る場合→have to

確信「～に違いない」周りの状況から判断して断定的な推量

③have to do が「～に違いない」の意味で使われることがある

◎反意表現

肯定形	否定形
「～してもよい」 You may take pictures. You can take pictures.	⇔ 「～してはいけない」 You may not take pictures. [不許可] You cannot take pictures. [不許可] You must not take-pictures. [禁止]
「～しなければならない」 You must wait here. You have to wait here.	⇔ 「～する必要がない」 You don't have to wait here. You need not wait here.
「～に違いない」 They must be tired.	⇔ 「～であるはずがない」 They can't be tired.

◎should [ought to do]

義務・助言「～すべきだ、～したほうがよい」

強制的な意味合いもない。「～したほうがよいと思う」くらいの意味

否定：「～すべきではない、～しないほうがよい」

④ought to の意味は should とほとんど変わらないが、やや硬い表現

ought to do の否定形→ought not to do.

推量「～のはずだ、～するはずだ」

→話し手が「そうあるべきだ[そうあってほしい]」と期待すること

must や will よりも確信度は低い。

◎that 節中の should

①感情や主観的判断を表す形容詞に続く that 節の中

It's natural that she should be disappointed. （彼女が落ち込むのも当然だ。）

②必要性や重要性を表す形容詞に続く that 節の中

It's important that we (should) share information.

（我々が情報を共有することが大切だ。）

③提案や要求を表す動詞の後に続く that 節の中

He proposed that we (should) decide by majority.

(彼は私たちが多数決で決めることを提案した。)

②③の場合、**仮定法現在**(動詞の原形)が用いられることが多い

◎had better do

命令・忠告「**～しなさい**」「**～するのがよい**」

⑥You を主語にすると **命令口調**→子どもや親しい人以外には使わない

⑥否定形→**had better not do** で、「**～するな、～してはいけない**」

◎will

未来の予測「**(未来において)～だろう**」→単純未来

→話し手の意志に関わらず、「自然の成りゆき」で起こりそうな事柄

意志：現在の意志「**～するつもりだ**」→意志未来

否定「**どうしても～しようとし**ない」という現在の拒絶

過去形の would not 「**どうしても～しようとし**なかった」→過去の拒絶

依頼 Will[would] you ~? 「**～してくれますか[いただけますか]**」→聞き手が当然すべきことを依頼する→**強制的なニュアンス**を含むことがある

Would you~?は Will you~?よりも **丁寧な依頼**→+please でより丁寧な表現

現在の推量「**(今)～だろう**」→確信度は高く、ほぼ確実

would は will よりも確信度が低い

習性・習慣「**～するものだ、(よく)～する**」普通は3人称が主語

過去の習慣「**(よく)～したものだ**」→often などの**頻度を表す副詞**、when I was a child (子どもの時)などのような**過去を表す語句**を伴うことが多い

would の後→**動作動詞**

⑥**used to do** も過去の習慣

◎used to do

過去の習慣「**(以前は)～したものだ**」→「過去には～だったが今は～していない」

後に**動作動詞**

過去の状態「**(以前は)～だった**」→「過去には～だったが今はそうではない」

後に**状態動詞**

⑥[否定文] I **didn't use to** like him but now I do.

(以前は彼のことが好きではなかったけれど、今は好きです。)

[疑問文] **Did you use to** like him? (以前は彼のことが好きでしたか。)

◎used to do と would 「(よく)～したものだ」

①**would**→×状態動詞 **状態を表す**→used to do

②**動作動詞**→○used to do、would

used to do は「**かつてはよく～したが今はそうではない**」→現在との対比

would→過去のことを**回想的に**述べる

	used to do	would
過去の状態(状態動詞)	○	×

過去の習慣(動作動詞)	○	○
ニュアンス	現在との対比	回想的

◎shall「相手の意向」を尋ねる

申し出る Shall I ~? 「(私が) ~しましょうか」

= Do you want me to ...? [親しい人に対して使う]

= Would you ...? [丁寧な表現]

提案する Shall we ~? 「(一緒に) ~しませんか」

= Let's ... = Do you want to ...? [親しい人に対して使う]

= Would you like to ...? [丁寧な表現]

参 Let's + 動詞の原形, shall we? → 付加疑問

参 動詞と助動詞がまぎらわしい need と dare

① need 「~する必要がある」

助動詞 need → 否定文・疑問文

動詞 need → 肯定文: need to do

② dare 「あえて[思い切って、あつかましくも] ~する」

助動詞の dare → 否定文・疑問文

dare は慣用表現でも使われる。

How dare you say such a thing? (よくもそんなことが言えるものだ。)

I dare say you've heard about him.

(おそらくあなたは彼のことを聞いているでしょう。)

◎「義務・必要」「依頼」表現

(1)「義務・必要」の強制の度合い

強	must	~しなければならない
	have to	
↓	had better	~しなさい
弱	should / ought to	~すべきだ, ~したほうがよい

(2)「依頼」の丁寧さの度合い

高	Would you ~?	~していただけますか
	Could you ~?	
↓	Can you ?	~してくれますか
	will you ~?	
↓	Please ~	~してください
低	~ (動詞の原形)	~しなさい

◎be supposed to do

be supposed to do → 義務

should と同じような意味「(法律、約束、習慣などで) ~することになっている[しなければならない]」と柔らかなニュアンスの義務, 助言

否定文は婉曲的な禁止を表す。

You are not supposed to enter this room. (この部屋に入ってはいけないよ。)

◎助動詞の be, have, do

③can, may, must などとは違い、be, have, do は主語の人称や数によって形が変化

2つの助動詞が並ぶこともある。文法上の働きによって形が異なる。

be 動詞の現在分詞と結び付いて**進行形**、過去分詞と結び付いて**受動態**

have 動詞の過去分詞と結び付いて**完了形**

do **否定文・疑問文**をつくる、動詞の意味を**強調**、**倒置構文**で用いられる

◎過去についての推量

1. must have+過去分詞「**～したに違いない、～だったに違いない**」
→過去のことについての現在の確信を表す
2. may [might] have +過去分詞「**～したかもしれない、～だったかもしれない**」
過去のことについての現在の推量、might のほうが確信度は低い
may [might] not have +過去分詞
「**～しなかったかもしれない、～でなかったかもしれない**」
3. can't [couldn't] have +過去分詞「**～したはずがない、～だったはずがない**」
過去のことについての現在の推量、couldn't のほうが確信度は低い。
4. could have+過去分詞「**～した可能性がある、～だった可能性がある**」
過去においてそうな可能性があったという現在の推量
④この意味での肯定文は could のみで、can は使えない。
疑問文は「**～した[だった]**ということがあるだろうか」という意味で、can も could も使える。
5. should [ought to] have+過去分詞「**～したはずだ、～だったはずだ**」

◎過去についての非難・後悔

1. could have+過去分詞「**～できたのに(しなかった)**」
実際にはしなかったが、過去においてしようと思えばできたこと
2. should [ought to] have+過去分詞「**～すべきだったのに(しなかった)**」
主語が I と we→**後悔** それ以外→**非難**
③否定文 should not、ought not to 「**～すべきではなかったのに(した)**」
3. needn't have+過去分詞「**～する必要はなかったのに(した)**」

◎助動詞の構文

1. **would like ~** 「～が欲しいのですが」
want よりも**控えめで丁寧な言い方**
あまり親しくない人、目上の人→would like ~
Would you like ? 「はいかがですか」
→相手に何かを勧めたり希望を尋ねたりするときの丁寧な表現。
Do you want ~?→同じような意味→**親しい人**に対して
2. **would like to do** 「～したいのですが」
want to do (～したい)よりも**控えめで丁寧な言い方**
→あまり親しくない人や目上の人の時
Would you like to do ? は「～しませんか」

→相手を誘ったり、何かを勧めたりするときの丁寧な表現。

Do you want to do ~?→同じような意味→**親しい人**に対して使う。

3. **would rather do~(than do …)** 「(…するよりも)むしろ~したい」

希望を控えめに述べる表現、rather や than の後には動詞の原形、than 以下が省略されることもある。

would rather not do ~は「どちらかと言えば~したくない」

→**気が進まないことを控えめに伝える**表現

4. **may [might] well do** 「おそらく~するだろう」

推量の意味、この場合の well→「十分,道理にかなって」という意味、

may [might]が表す可能性を高める、**might のほうが確信度は低くなる**

= **It is likely that ~will do.**

③may [might] well do が「**~するのをもっともだ**」道理にかなって正当

= **It is natural that you should …**

5. **may [might] as well do** 「(気は進まないが)~したほうがいい」

消極的な提案、might のほうがより控えめ、

may [might] as well do ~ as do…の as do が省略

③may [might] as well do~ as do 「**…するくらいなら~するほうがましだ**」

極端な例え、「(…するのと同じくらいに)~するのがよいかもしれない」

→「(どちらも大差なければ)~するほうがましだ」→「~するほうがましだ」

6. **only have to do** 「~しさえすればよい(ほかのことはしなくてもよい)」

「ただ…だけ(only)」 「~しなければならぬ(have to do)」

→「~しさえすればよい」、**have only to do** の語順になることもある。

= **You have only to**

④**All you have to do is (to) do** 「~しさえすればよい」、この all は単数扱い

7. **cannot ~ too…** 「いくら~してもしすぎることはない」

③cannot ~ enough 「いくら~しても足りない」→強調表現。

8. **cannot help doing** 「~せずにはいられない」

cannot help but do [~せざるを得ない]

help「避ける」→「避けることができない[~することが避けられない]」→「~せずにはいられない[~せざるを得ない]」

cannot help の後は**動名詞**、cannot help but の後は**動詞の原形**

cannot help but do→cannot help doing + cannot but do→**標準的語法**

③cannot but do は**堅い言い方**、現在では上記2つの表現のほうが普通。

受動態

◎be 動詞+過去分詞「**S は~される**」→能動態の目的語(O)が受動態では主語(S)

動作主は by ~

過去の受動態 was / were +過去分詞「**~された[されていた]**」

否定文 be 動詞+ not+過去分詞

Yes / No 疑問文 be 動詞+主語+過去分詞…?

疑問詞で始まる 疑問詞が主語でない→疑問詞+be 動詞+主語+過去分詞…?

疑問詞が主語→疑問詞(主語) +be 動詞+過去分詞…?

③**Who + be 動詞+主語+過去分詞+by?** 「誰によって~されたのか」

by を文頭に出す→whom By whom…? (書き言葉)

◎動作主を示さない受動態：動作主が重要でない

①動作主が we, you, they, people など「一般の人々」

②動作主が明らか

③動作主がわからない、あるいは表しづらい

④動作主 by ~が示される→その動作主に重点を置いたり注目させたりする

⑤受動態の主語

「昨日、私の財布が盗まれた。」× I was stolen my wallet yesterday.

steal は「~を盗む」で物が目的語にくるので、受動態で物が主語

使役動詞 have = I had my wallet stolen yesterday. →被害を受けたニュアンスが強

⑥受動態の使用 あえて受動態を用いる必要がない→能動態

①動作を受ける側に重点を置きたい場合

ニュースなどで被害者に重点を置く場合

②話題にのぼっていることを主語にする場合

前の文で出てきた話題について話を続ける場合

すでに話に出てきた情報→主語、新しい情報→後ろに

③論文などで客観的事実を述べる

実験などでプロセスに重点を置く場合

◎助動詞を含む 助動詞+be+過去分詞

否定文 助動詞+ not +be+過去分詞.

can be+過去分詞	~されることができる
may be+過去分詞	~されるかもしれない
must be +過去分詞	①~されなければならない ②~されるに違いない
should be+過去分詞	①~されるべきだ ②~されるはずだ

④used to や ought to →受動態で用いられる

◎未来

will be+過去分詞「~されるだろう」→未来の予測

be going to be+過去分詞「~されることになっている」→未来の確実な予定

◎進行形

be 動詞+ being+過去分詞「~されているところだ (った)」

→主語が何らかの動作を受けている最中

④未来進行形 will be being+過去分詞「~されているところだろう」

→実際には用いられることは少ない。

◎完了形

現在完了形 have/has been+過去分詞

過去完了形 **had been** + 過去分詞

未来完了形 **will have been** + 過去分詞

③助動詞を使った完了形 助動詞 + **have been** + 過去分詞

④受動態の時制

「メッセージ送信中にエラーが発生しました。」

An error occurred while the message was being sent.

「メッセージ送信中に」→「メッセージが送信されている間に」

→過去進行形の受動態

I を主語にした能動態の過去進行形

= An error occurred while I was sending the message

◎SVOO の受動態

give + O + O 型 → 2 つの目的語をそれぞれ主語にした 2 つの受動態 → for 省略 ×

の語順になる。

O (人) を主語にする → 人 + **be** 動詞 + 過去分詞 + 物

O (物) を主語にする → SVO + to + 人 → 物 + **be** 動詞 + 過去分詞 + to + 人

③O (物) を主語にするとき、to を省略可能だが、to を入れるほうが普通、

対比を表すときは必ず to を入れる

③どちらの目的語を主語にするか

「旧情報は先に, 新情報は後に」という原則 → すでに話題になっているものを主語に立て、新しい情報を後ろに回すほうが自然な流れになる。

buy + O + O 型

SVO + for + 人の形にして、物 + **be** 動詞 + 過去分詞 for + A → for 省略 ×

③buy だけは人を主語にした文がくれるが、実際にはあまり使われない

buy 以外の (buy + O + O) 型の動詞は O (人) を主語にした受動態 ×

◎SVOC の受動態

目的語(O)を受動態の主語(S)にする。 **be** 動詞 + 過去分詞 + C に、補語(C)を主語(S)にした受動態 ×

◎say を使った受動態

They [People] say that (…だと言われている)

→ **It is said** (that) 「…だと言われている」

S is said to do 「S は~する[である]と言われている」

believe, think, know, suppose, consider (考える), **expect** (期待する), **report** も同じように 2 種類の受動態に書きかえることができる

③ **S is said to have** + 過去分詞 「S は~したと言われている」 → to 以下が示す事柄は「言われている」より前の事柄

◎群動詞の受動態

1 つの動詞と考えて受動態にする

③群動詞を受動態にする場合 → × 前置詞や副詞を省いたり離したりする

be brought up (育てられる) **be laughed at** (笑われる)

be put off (延期される) be spoken to (話しかけられる)
be called off (中止される) be looked up to (尊敬されている)
be run over ([車に]ひかれる) be taken care of (世話をされる)

③take care of のように名詞(care)を含んだ群動詞の受動態→その名詞が主語になることもある。名詞には great, good, little, too much などの修飾語句が付くことが多い。

◎by 以外の前置詞

1. by 以外の前置詞→「原因・理由・手段・道具・材料,適用範囲」

慣用表現: be filled with (～でいっぱいある) be caught in ~ ([雨など]にあう)
be covered with ~ (～で覆われている) be known to ~ (～に知られている)

④be known by ~ 「～で知られている」→ by は基準

⑤動作主が意図的に知ろうとした場合→be known by 「～に知られている」

2. 感情を表す受動態

日本語の「驚いた」→英語では受動態

surprise 「～を驚かせる」、「S は驚かされた」→受動態「S は驚いた」

surprised など-ed の語は、過去分詞というよりも、主語の状態を表す形容詞だと考えることも可

be surprised at ~ (～に驚く) be amazed at [with] ~ (～にひどく驚く)

be shocked at ~ (～にショックを受ける) be pleased with [at] ~ (～に喜ぶ)

be satisfied with ~ (～に満足する) be interested in ~ (～に興味がある)

be delighted with [at] ~ (～に大喜びする) be frightened of ~ (～を怖がる)

be disappointed [in, with] ~ (～にがっかりする)

be excited at [about] ~ (～に興奮する) be worried about ~ (～を心配する)

⑥動作主の影響が大きく感じられるとき→by

3. 被害を表す受動態

「負傷する」などの被害→受動態

injure 「～を傷つける」、「S は傷つけられる→S は負傷する」

be hurt (傷つく) be injured (けがをする) be wounded (負傷する)

be killed ([戦争や事故で死ぬ) be delayed (遅れる)

4. 日本語では受け身の感覚がない表現

日本語と英語で、能動態・受動態の発想が異なる

(be 動詞+過去分詞) = (be 動詞+形容詞)

be married to ~ (～と結婚している) be born (生まれる)

be crowded with ~ (～で混んでいる) be raised (育つ)

be dressed in ~ (～を着ている) be seated (座る)

⑦marry を使った英作文

「ケイトはビルと結婚して3年になる。」

Kate has been married to Bill for three years.

→「ケイトは3年間、ビルと結婚している。」

「～と結婚している」は ×be married with ~、be married to ~

「ケイトとビルは3年間、結婚している」と考えて

= Kate and Bill have been married for three years.

◎受け身の意味を表す能動態

「～される側」を主語に立てても、受動態ではなく能動態で表すものもある。

「売る人」ではなく、「売られる物」(book)が主語→×受動態

sell「(商品などが)売れる」→自動詞、普通, well などの副詞を伴う。

read「読める」 cut「切れる」

◎動作・変化を表す受動態/状態を表す受動態

動作・変化「～される」、状態「～されている」

どちらを表しているかは文脈から判断

◎受動態で be 動詞以外の動詞が使われる

get [become] +過去分詞 「～される」→動作・変化をはっきりさせるとき

→be 動詞の代わりに get や become などを使う、get のほうが口語的

◎get [become] acquainted with ～「～と知り合う」

remain+過去分詞「～のままである」→状態をはっきりさせるとき

◎get「動作・変化」

get は「獲得する、手に入れる」という動きのある表現

SVC (第2文型)の表現で, be 動詞の代わり→get→状態の変化

get +過去分詞→be 動詞を使えば状態、get を使えば動作、変化

get +過去分詞→予期していない動作や変化

英語の情報構造

「旧情報」が先、「新情報」が後

相手が知っていること(旧情報)から相手が知らないこと(新情報)へという流れ

相手がまだ知らない情報→情報価値の高い情報(=重要な情報)→文の後ろ

1. 受動態

旧情報(It-Botchan)から新情報(Natsume Soseki)へ①のほうが情報の流れが自然

①My favorite novel is Botchan, It was written by Natsume Soseki

②My favorite novel is Botchan. Natsume Soseki wrote it

◎it などの代名詞→すでに出てきた名詞の代わり、旧情報を表す。

冠詞 the もすでに話に出てきた名詞に付いて、旧情報を表すことが多く、逆に固有名詞や a/an が付いた名詞は新情報を表すことが多い。

2. There + be 動詞+主語(S) (S~がある[いる])

There+be 動詞とワンクッション置く→唐突に新情報から文を始めるのを防ぐ

3. 倒置

場所・方向を表す副詞句が旧情報として文頭に置かれて、「(そこに)~がいる[来る]」(主語と動詞が入れかわる倒置が起こる)、小説などでよく見られる

4. SVOO と SVO+to/for A

SVOO と SVO + to/for A は交替可能な場合が多い、情報構造の観点から自然なほうを選ばれる。

×be 動詞+過去分詞+O (人) +O (物)

不定詞

to + 動詞の原形→名詞・形容詞・副詞

1. 名詞的用法「～すること」→主語,補語,目的語

◎主語→形式主語の **it** を本来の主語の位置に置き,真主語である不定詞は文末に置くことが多い、it は意味を持たない形式的なもので、「それは」と訳さない。

◎補語→主語の内容を説明する

◎目的語→他動詞が続く

◎SVOC (第 5 文型)の文で目的語(0)が不定詞

→形式目的語の **it** を置き **SV+it+C+to 不定詞** **it** は「それを」とは訳さない

◎英語では、「短い語(句)→長い語(句)」の配置が好まれる

①形式主語

不定詞を含む語句が主語になる場合→形式主語にかえて、真主語を後ろに置く

②形式目的語

不定詞を含む語句が目的語になる場合→形式目的語にかえて、後ろに置く。

2. 形容詞的用法

不定詞を含む語句が直前の名詞や代名詞を後ろから修飾

「～する…」 「～すべき…」 「～するための…」

修飾される名詞(不定詞の直前の名詞)が不定詞の主語の働きをする場合、目的語の働きをする場合がある

◎直前の名詞が主語：主語と動詞の関係

◎直前の名詞が目的語：動詞と目的語の関係

◎直前の名詞が前置詞の目的語：不定詞の後の前置詞→省略できない

前置詞とその目的語の関係

④表す内容によって前置詞が異なる。

(何か[それで= with]書くものを持ってきて.)

(何か[その上に=on]書くものを持ってきて.)

直前の名詞の内容を説明する：同格の関係

不定詞と同格の関係で使われる名詞は限られており、多くは動詞から派生したもの、形容詞から派生したもので、抽象名詞が多い。派生元となる動詞や形容詞で言い換えられる場合が多い。

◎動詞から派生したもの

attempt (試み) **desire** (強い願望) **promise** (約束)

decision [**determination**] (決心,決意) **failure** (失敗) **tendency** (傾向)

plan (計画) **wish** (願望)

◎形容詞から派生したもの

ability (能力) **freedom** (自由) **curiosity** (好奇心)

reluctance (いやがること) **eagerness** (熱意)

◎直前の名詞の内容を表す不定詞で用いられる名詞

◎同格の関係で使われるその他の名詞

way (方法) **duty** (義務) **time** (時間) **right** (権利)

chance [**opportunity**] (機会) **reason** (理由) **money** (お金)

◎同格の不定詞に使える名詞→不定詞が必ずしも同格ではない

3. 副詞的用法

不定詞を含む語句が名詞以外の語句(動詞・形容詞・副詞など)や文全体を修飾

◎動作や行為の目的「～するために…」

特に強調したい場合文頭に置くこともできる

④in order to do や so as to do → 目的の意味であることをより明確に

◎感情の原因

不定詞が感情を表す形容詞と結びついて感情の原因「～して…」

主な形容詞 be 形容詞 to do

glad / happy / delighted / pleased (～してうれしい)

sorry (～して残念な) disappointed (～してがっかりした)

proud (～して誇りに思っている) thankful (～して感謝している)

surprised (～して驚いた) upset (～してうろたえた)

◎判断の根拠

「人の性質や人柄,能力を示す形容詞」と結び付いく

→「～するなんて,～するとは…」

must (～に違いない)や can't (～のはずがない)などの助動詞と共に用いられ
たり,感嘆文の形で用いられることが多い。

◎結果「…して(その結果)～」→予想外の出来事が起こったことを示す,意志
を伴わない動詞が to の後に続く

④only to do は必ずしも結果の用法であるとは限らない。

「ただ～するただけに」と目的を表す場合もある。

◎結果を表す不定詞の慣用表現//

wake up [awake] to find ~ (目を覚ますと～と気付く)

grow up to be ~ (成長して～になる) live to be ~ (生きて～となる[する])

… , only to do (…したが,結局～しただけだった)

… , never to do (…して,二度と～しない)

④only to do , never to do の前にはコンマが置かれることが多い。

◎条件・仮定を表す不定詞

不定詞の副詞的用法が条件・仮定 (～にすれば) を表すことがある

◎不定詞の意味上の主語

for で示す

不定詞→述語動詞でないが、動詞の性質を持ち、その動作や状態の主語にあたるものがある。これをその文の
主語と区別して、不定詞の意味上の主語という

for+名詞・代名詞を不定詞の直前に置き→It is+形容詞+for+名詞・代名詞+to 不定詞

→名詞的用法だけではなく,形容詞的用法や副詞的用法においても用いられる。

of で示す

不定詞の意味上の主語は for ~で表すのが一般的だが(of+名詞)の場合もある。

It is+形容詞+of+名詞・代名詞+to 不定詞→人の性質や人柄,能力などを示す

感嘆文でも同じような意味を表せる。

kind / good / nice (親切な) smart / wise / clever (賢明な) bad (ひどい)
 polite (礼儀正しい) brave (勇敢な) considerate (思慮深い)
 stupid / foolish/silly (ばかな,愚かな) careless (不注意な) cruel (残酷な)
 wrong (間違っている) rude / impolite (無礼な,失礼な) selfish (身勝手な)

◎意味上の主語を示さない場合

- ①意味上の主語が文の主語(S)と同じ場合
- ②意味上の主語が一般の人々の場合
- ③意味上の主語が文脈から明らかな場合

◎SVO+to 不定詞

O が不定詞の意味上の主語になり, 「O が~する」

want + O+ to do 型「O に~してほしい」→希望・願望

hate (~するのを嫌う) want / would like (~してほしい)

allow+O+ to do 型「O が~するのを許す、O に~させる」→許可・使役

allow/ permit (許す) enable (可能にする) encourage (励ます、勧める)

force / compel (無理やり~させる) cause (原因となる) get (~させる)

tell +O+to do 型「O に~するように言う」→命令,依頼

advise (勧める) order(命じる) ask (頼む) request / require (要求する)

persuade (説得する) tell (命じる)

㊦命令・依頼を表す動詞の文→that を使って言い換えることができる。

㊦believe [think, suppose](思う),find (わかる),consider (考える),expect (予期する)などの思考・認識を表す動詞→SVO + to be 「Oは~だとわかる」

㊦suggest(提案する), hope (望む), explain (説明する)→×SVO + to 不定詞

◎不定詞の否定形

不定詞の直前に not, never を置く、never は not より強い否定

㊦not の位置によって,文の意味が違ふ

㊦目的を表す不定詞の否定形→in order not to do や so as not to do を使う

◎SVO +原形不定詞

to が付かず動詞の原形で不定詞の働きをするもの→使役動詞、知覚動詞と共に使われ、SVO +原形不定詞→

O が原形不定詞の意味上の主語

使役動詞+O+原形不定詞(do)「O に~させる」

強	make	「(強制的に O に~させる) = (force / compel + O + to do)
▼	have	「(O がすべきことを)O に~させる、~してもらう」
弱	let	「O が~することを許す」 = (allow + O + to do)

㊦意味上の主語が 3 人称単数の場合でも原形不定詞は原形のまま

㊦Let me do 「私に~させてください」「(私が)~しましょう」

let の否定文→「O が~することを許さない」という禁止の意味

㊦get + O + to do で「(説得して)O に~してもらう」

make,have,let→原形不定詞 get→to 不定詞を用いる

何らかの困難や努力を伴うことが予想される場合などに使われる

③help+ O +原形不定詞[to 不定詞]「O が~するのを手^て伝^たう」

原形不定詞を使うほうがより口語的、

知覚動詞+O+原形不定詞(do)「O が~するのを…する」O が原形不定詞の意味上の主語

see (O が~するのが見える) listen to (O が~するのを(意識して)聞く)

hear (O が~するのが(意識せずとも)聞こえる)

feel (O が~するのを感じる) notice / observe (O が~するのに気付く)

watch (O が~するのをじっと見る) look at (O が~するのを見る)

④知覚動詞+ O +現在分詞[過去分詞]との違い

現在分詞→動作の一瞬

原形不定詞→動作の最初から終わりまで

◎使役動詞,知覚動詞の受動態

原形不定詞→受動: to 不定詞 be 動詞+過去分詞+to do

使役動詞の中で受動態がある→make のみ、×have, let

知覚動詞→see, hear のみ

◎疑問詞+ to 不定詞

「疑問詞の意味+~すべきか[~するか]」→主に動詞の目的語

why to do は普通用いない

what to do (何を~すべきか) which to do (どちらを~すべきか)

who[whom] to do (誰を[誰に]~すべきか) when to do (いつ~すべきか)

where to do (どこで[どこへ]~すべきか)

how to do (どのように~すべきか[~する方法])

⑤what, which, whose の後に名詞を伴う→ what [which, whose]+名詞+to 不定詞「どの[どちらの,誰の]…を~すべきか」

接続詞 whether(~かどうか)→whether to do で「~すべきかどうか」

⑥「疑問詞+to 不定詞」が主語・補語として用いられる場合

補語→主に The question [problem] is の形

◎不定詞が表す時

1. to+動詞の原形→述語動詞と同じ時

◎述語動詞→現在形で「現在」、不定詞→「現在」

◎述語動詞→過去形で「過去」、不定詞→「(同じ時である)過去」

2. have +過去分詞

不定詞→動詞としての性格もある→完了形「to have +過去分詞」

to have +過去分詞→完了不定詞、述語動詞よりも前の時

◎述語動詞→現在形で「現在」、不定詞→述語動詞より前の時→「過去」

◎述語動詞→過去形で「過去」、不定詞→述語動詞より前の時

→「それ以前(さらに過去)」

to have +過去分詞→現在完了の意味を表す場合もある。

◎不定詞の進行形

不定詞の出来事が進行中である→to be + doing

seem to be + doing 「~しているようだ」

③完了不定詞の進行形 to have been + doing

◎不定詞の受動態

不定詞の出来事を受動態で表す場合→to be + 過去分詞

完了不定詞の受動態 to have been + 過去分詞

③be to blame 「責めを負うべきである」

「責められるべきだ」→×be to be blamed、慣用的に be to blame

◎難易を表す形容詞を修飾

be 動詞+難易を表す形容詞+to 不定詞「~するには…だ」

主語が不定詞の目的語、不定詞の後には目的語を続けない

不定詞の意味上の主語は for ~ を不定詞の直前に

形式主語 it を使ってほぼ同じ意味を表すことができるが、×It is ~ that

難易以外に、危険・安全、快・不快を表す形容詞も使われる

難易：difficult / hard (難しい) easy (簡単)

impossible (不可能な) tough (困難な)

安全・危険：safe(安全な) dangerous (危険な)

快・不快：pleasant (楽しい) unpleasant (不愉快な)

comfortable (快適な) uncomfortable (不快な)

convenient (便利な)

×important (重要な) possible (可能な) necessary (必要な)

前置詞付きの不定詞が用いられることがある、主語が前置詞の目的語

◎be 動詞+形容詞+ to 不定詞

be ready to do (～する用意ができている,喜んで～する)

be eager [anxious] to do (～したがっている,～することを切望する)

be unable to do (～できない) be willing to do (～しても構わない)

be unwilling [reluctant] to do (～したがらない)

be likely to do (～しそうだ) be sure [certain] to do (きっと～する)

be apt [inclined] to do (～しがちである) be free to do (自由に～できる)

◎動詞+to 不定詞

manage to do (なんとか～する) come [get] to do (～するようになる)

happen to do (たまたま[偶然]～する) learn to do (～する[できる]ようになる)

seem. [appear] to do (～と思われる～のようだ～らしい)

prove [turn out] to be ~ (～であることがわかる[判明する])

can afford to do ([通例,否定文・疑問文で](時間的・経済的に)～する余裕がある)

refuse to do (どうしても～しようとしなない) fail to do (～できない)

④ learn to do 「(経験などを積んで習得し)～できるようになる」

come to do 「～するようになる」→主に感情や認識などの状態動詞

like, love, understand, know がくる

×become to do

◎代不定詞

不定詞の to の後に、前に出てきたものと同じ動詞(句)が入る場合→繰り返しを避けるために **to だけを残して動詞以下を省略**、to は強勢を置いて発音

否定の代不定詞は not to

◎be 動詞+ to 不定詞

助動詞と同じような意味、やや堅い表現。

1. 予定「~することになっている」

はっきりと決まっている計画や公的な行事について使われる。

2. 意図・目的「(もし)~するつもり(ならば)、~するためには」

条件を表す if 節の中で用いられる。

3. 可能「~できる」

主に否定文で用いられる to 不定詞は受動態

4. 義務・命令・禁止「~しなければならない」

should よりも命令のニュアンスが強い。

否定文「~してはいけない」→禁止

5. 運命「~する運命にある」

過去形で用いられることが多い。

㊦不定詞が補語となっている名詞的用法と混同してはいけない

Your job is to clean this room. [your job = to clean this room]

◎独立不定詞

不定詞が文のほかの要素から離れて独立した位置に置かれ、文全体を修飾
前置きや挿入として使われ、文頭に置かれるほか、文中や文尾に置かれる

to tell (you) the truth (実を言うと)

to make matters worse (さらに悪いことには)

to begin [start] with (まず第一に) **to be brief** (簡潔に言うと)

to be frank with you (率直に言うと) **to be sure** (確かに)

to be honest (with you) (正直に言って) **so to speak** (いわば)

needless to say (言うまでもなく) **strange to say** (奇妙なことに)

not to say A (A とは言えないまでも) **to do A Justice** (A を公平に評価すれば)

not to mention A (=not to speak of A, to say nothing of A) (A は言うまでもなく)

to say the least (控えめに言っても)

◎不定詞の構文

1. **too ~ to do** 「…するには~すぎる/あまりに~なので」

肯定文だが否定の内容を表す、too と to do の間には形容詞や副詞

=**so~ that** that 以下は否定形(can't)

㊦不定詞の意味上の主語は for ~で表す。

that 節の中は完全な文, that 節に書きかえたとき, 節の中の動詞の目的語を忘れないようにする

2. ~ enough to do 「…するほど(十分) ~ / (十分) ~なので…する」
肯定の内容を表す、enough は形容詞や副詞の前ではなく直後に置かれる
不定詞の意味上の主語は不定詞の直前に置かれる。
= so ~ that that 以下は肯定形(can) 形容詞[副詞]により書きかえ×
④ ~ enough not to do 「…しないほど~だ」
3. so ~ as to do 「するほど~ / とても~なので…する」
= so ... that = ...enough to do
4. order to do / so as to do 「~するために」
in order to do や so as to do → to do の「目的」の意味をより明確に
to の直前に not → 「~しないように」
5. All you have to do is (to) do 「~しさえすればよい」
() の to は省略できる
= You only have to do [You have only to do]
④ 主語が all でも単数扱いになり、be 動詞は is

④ 「親切にも~してくれた」

彼女は親切にも私に道を教えてくれた。

She was kind enough to show me the way

「彼女は私に道を教えてくれるのに十分親切だった。」

She was so kind as to show me the way.

「彼女はとても親切だったので、私に道を教えてくれた」

She was so kind that she showed me the way.

She kindly showed me the way.

「親切なことに、彼女は私に道を教えてくれた。」

動名詞

動詞の原形に ing が付いて「~すること」→名詞の働き

動名詞は、目的語、副詞を伴う→動詞の性質を持ちながら、文中で主語・補語・目的語・前置詞の目的語になる

◎動名詞が主語(S) 名詞の働き、動詞の性質→目的語をとる

④ 動名詞が主語のときに形式主語の it を使うことがある

fun, nice, a pleasure などの話し手の感情, 判断を表す名詞や形容詞と共に

It is no doing、It is worth doing など動名詞を使った慣用的な表現などの限られた場合に用いられる。

◎動名詞が補語(C) be 動詞 is の補語になっている。

◎動名詞が目的語(O)

◎動名詞が前置詞の目的語

④不定詞の名詞的用法は前置詞の目的語にはならない。

◎前置詞+動名詞でよく使われる表現

be fond of doing (~するのが好きである) before doing (~する前に)

be good at doing (~するのが上手である) by doing (~することによって)

be interested in doing (~することに興味がある) without doing (~しないで)

instead of doing (~する代わりに)

◎be 動詞+ doing

be 動詞+doing→be 動詞+動名詞、進行形

①動名詞→補語の働きをしている。

②(現在)進行形→動詞の働きをしている。

◎動名詞の意味上の主語

動詞の性質を持つ動名詞→動詞と同じようにその主語が存在する。

意味上の主語は示す場合と示さない場合がある。

◎意味上の主語が代名詞

目的格か所有格を動名詞の直前に置く、目的格のほうが口語的である。

㊤代名詞の主格を意味上の主語として用いることはできない。

◎意味上の主語名詞

そのままの形か,所有格を動名詞の直前に置く。

動名詞が文全体の主語になっている→意味上の主語は所有格

目的格やそのままの形は使えない。

◎動名詞の意味上の主語を示さない場合

(1)文の主語または目的語と同じ場合

(2)わざわざ言わなくてもわかる場合

(3)「一般の人々」の場合

◎Would you mind opening the window?

Would you mind my opening the window?の2つの文の違い

「窓を開けることになる人物」が違う

(1)意味上の主語はこの文全体の主語と同じ→you

「あなたは、あなたが窓を開けることを気にしますか。」

→「(あなたが)窓を開けていただけますか。」→依頼

mind「~するのを嫌がる[気にする]」→相手の依頼を受け入れるとき→"No problem." "Not at all", "Certainly not." "Of course not."「嫌ではありません」

(2)意味上の主語は直前の my です。「あなたは私が窓を開けることを気にしますか。」→「(私が)窓を開けてもいいですか。」→許可を求める

許可の求めを断る場合→“(I'm sorry, but) I'd rather you didn't.” ([申し訳ないのですが]できればしてほしくありません)

◎動名詞の否定形

名詞を否定→動名詞の直前に否定語の not や never を置き,

not[never] + doing「~しないこと」

㊤意味上の主語と動名詞の位置

私たちは春が来るのを楽しみにしています。

We are looking forward to spring coming.

look forward to doing 「～するのを楽しみにする」

spring が動名詞 coming の意味上の主語である。

意味上の主語→動名詞の前に置く ×We are looking forward to coming spring.

「春が来るのを」を「次の春を」と考えて

We are looking forward to next spring.

◎動名詞が表す時

動詞の原形+ ing 述語動詞と同じ時

1. 述語動詞は現在形で「現在」、動名詞も「現在」
2. 述語動詞が過去形で「過去」、動名詞も「(同じ時である)過去」

◎having +過去分詞

述語動詞よりも前の時、完了形の動名詞

3. 述語動詞は現在形で「現在」、動名詞述語動詞よりも前の時→「過去」

㊤完了形の動名詞が「過去のこと」ではなく、「過去から現在まで続くこと」→現在完了の意味を表すこともある

4. 述語動詞は過去形で「過去」、動名詞は述語動詞よりも前の時→「それ以前(さらに過去)」

㊤完了形の動名詞を否定する場合→動名詞の直前に not

◎動名詞の受動態

being+過去分詞「～されること」

完了形の動名詞の受動態 having been +過去分詞「～されたこと」

㊤動名詞の受動態を否定する場合も、動名詞の直前に not,never を置く。

◎need doing

need [want, require]doing は通例、物が主語になり「～される必要がある」

目的語になる動名詞が受動の意味

The shirt needs washing, (そのシャツは洗濯の必要がある.)

この washing は「洗う」という動詞的なニュアンスよりも「洗濯」という名詞的なニュアンスが強い。

同じ内容を不定詞で表す→need [want] to be+過去分詞：受動態の形

◎[動名詞+名詞]の用法

[動名詞+名詞]の形で後ろの名詞を修飾することがある。この用法の動名詞は、「～するための…」(目的)や「～用の…」(用途)の意味

a dining room(食堂) a sewing machine (ミシン)

a swimming pool (水泳プール) a sleeping car(寝台車)

a waiting room(待合室) a hearing aid (補聴器) a sleeping bag (寝袋)

a smoking room(喫煙室) a vending machine (自動販売機)

現在分詞は、後に置かれる名詞との間に SV の関係が成立、動名詞→SV の関係が成立していない。

〈動名詞+名詞〉動名詞のほうが強く読まれる。

〈現在分詞+名詞〉名詞のほうが強く読まれる

動名詞の構文

1. **It is no use [good] doing** 「～しても無駄である」
= **There is no use [point] (in) ing**
 2. **There is no doing** 「～することはできない」
= **It is impossible to** 動詞の原形
= **No one can [We cannot]**
 3. **be worth doing** 「～する価値がある」
文の主語は動名詞の意味上の目的語。
= **It is worth [worthwhile] ing**
 4. **on doing** 「～するとすぐ」
前置詞 on→物と物が接触している様子を表す、2つの行為が時間的に接触しているときにも用いることができる。
As soon as ...
◎**in doing** は「～する際に」 現在ではまれな用法。
=...when ~
 5. **It goes without saying that** 「…は言うまでもないことだ」
= **Needless to say, ...**
 6. **feel like doing** 「～したい気分だ」
 7. **be on [at] the point of doing** 「まさに～しようとしている」
= **be about to do**
 8. **make a point of doing** 「～することにしている」
「努めて～する、～することを重視する」類似表現→**make it a rule to do** (～することにしている)
- ◎前置詞 to の後に動名詞がくる表現
to 不定詞がくるものと混同しないように注意が必要。
9. **look forward to doing** 「～するのを楽しみにする」
進行形で用いられることが多い、to の後に名詞がくることもある。
 10. **be used to doing** 「～するのに慣れている」
= **be accustomed to doing**
be 動詞の代わりに get を用いると「～することに慣れる」という変化
= **get used to doing**
 11. **with a view to doing** 「～するために」
 12. **when it comes to doing** 「～するということになると」
 13. **What do you say to doing** 「～したらどうだろう」

◎まぎらわしい used to

形	意味	解説
used to do ju:st	(以前は)～したものだ	used to は助動詞
be used to doing ju:st	～することに慣れている	動名詞を使う慣用表現
be used to do ju:zd	～するために使われる	受動態+to 不定詞

動名詞と不定詞

◎動詞の目的語になる動名詞と不定詞

動名詞と to 不定詞はどちらも動詞の目的語になる。どちらを目的語とするかは動詞によって決まる。動名詞のみを目的語とする動詞, to 不定詞のみを目的語とする動詞,どちらも目的語とする動詞がある。

◎動名詞のみを目的語とする動詞

動名詞はすでに起こったこと,当面の事柄を表すことが多い。

megafepsda (メガフェプスダ)

mind doing (～を気にする) miss doing (～し損なう)

enjoy doing (～を楽しむ) give up doing (～をやめる)

admit doing (～を認める) finish doing (～を終える) escape doing (～を免れる)

practice doing (～を練習する) postpone [put off] doing (～を延期する)

stop doing (～をやめる) suggest doing (～を提案する)

deny doing (～を否定する) avoid doing (～を避ける)

consider doing (～をよく考える) quit doing (～をやめる)

◎不定詞のみを目的語とする他動詞

to 不定詞以下の内容は未来のことを表すことが多い。

agree to do (～に同意する) attempt to do (～を試みる)

decide to do (～を決める) expect to do (～すると思う)

fail to do (～できない) learn to do (～するようになる)

hope to do (～することを望む) plan to do (～を計画する)

offer to do (～を申し出る) promise to do (～を約束する)

pretend to do (～するふりをする) refuse to do (～を拒む)

wish to do (～したいと思う)

◎動名詞も不定詞も目的語とする動詞(ほとんど意味は変わらない)

どちらを使ってもほとんど意味は変わらない。

①「好き・嫌い」を表す動詞

like doing/todo (～が好きである) love doing/to do (～が大好きである！)

prefer doing /to do (～がより好きである) hate doing/ to do (～を嫌う)

②「開始・継続」を表す動詞

start doing / to do (～を始める) begin doing / to do (～を始める)

continue doing/ to do (～を続ける)

◎動名詞も不定詞も目的語とする動詞(意味が違う)

動名詞を目的語とするか to 不定詞を目的語とするかで意味が違う

remember doing (～したことを覚えている)

remember to do (～することを覚えておく,忘れずに～する)

forget doing (～したことを忘れる)

forget to do (～することを忘れる)

regret doing (～したことを後悔する)

regret to do (残念ながら~しなければならない)

try doing (試しに~してみる)

try to do (~しようとする)

㊤remember doing の場合,続く動名詞(seeing)を完了形(having seen)にすることもできるが覚えている内容は過去のことであるのは明らかなので, seeing とするのが普通。forget も同様。

㊤regret to do→be sorry to do (残念ながら~する)よりもやや改まった表現。

㊤try doing→「~してみた」→「結果がどんな具合か見る」という含みがある。

try to do→「~しようとした」というだけで、実際にしたとは限らない。

◎stop doing と stop to do

stop doing : 「~するのをやめる」の意味で,動詞の目的語になる

stop to do : 「~するために立ち止まる[手を止める],立ち止まって、[手を止めて]~する」という意味 stop は自動詞で, to 不定詞は「~するために」という意味の副詞的用法。

◎その他の注意すべき表現

be sure of doing (~することを確信している)→文の主語が確信

be sure to do (必ず~する)→文の話し手が確信

分詞

分詞には現在分詞と過去分詞がある。

分詞が形容詞の働きをして名詞を修飾し,意味を限定→限定用法

現在分詞→「~している,する」能動、過去分詞→「~される,された」受動

◎名詞を修飾する分詞(限定用法)

分詞の前置修飾：分詞 1 語→普通は名詞の前に置かれる、修飾される名詞と修飾する分詞との間には意味上の SV の関係

分詞の後置修飾：目的語や補語や副詞句を伴い, 2 語以上の句(分詞句)→ 分詞句は名詞の後ろに置かれる

㊤関係代名詞を使っても表せる

◎形容詞化した分詞

分詞の中には,形容詞として用いられるようになったものがある。→分詞形容詞

感情に影響を与える他動詞は分詞形容詞になっているものが多い。

現在分詞→「(人)を~させる」能動、過去分詞→「(人が)~させられる」受動

㊤分詞形容詞は、補語としても用いられる。

exciting / excited (興奮させる/興奮した)

boring / bored (退屈させる/退屈した) pleasing / pleased (喜ばせる/喜んで)

satisfying / satisfied (満足させる/満足した)

confusing / confused (混乱させる/混乱した)

disappointing / disappointed (失望させる/失望した)

surprising / surprised (驚くべき/驚いた)

amazing / amazed (驚嘆すべき/驚嘆した)

shocking / shocked (衝撃的な/ショックを受けた)

interesting / interested (興味深い 興味を持った)

amusing / amused (おもしろい/おもしろがっている)

a surprising fact (人を驚かせる事実→驚くべき事実)

a surprised man (何かにより驚かされた男性→驚いた男性)

a boring speech (人を退屈させる話→退屈な話)

a bored person (何かにより退屈させられる人→退屈している人)

㊦ a boring person は「退屈させる人」→「退屈な人」の意味になる。

そのほか、形容詞化した分詞には次のようなものがある。

a boiled egg (ゆで卵), fried chicken (フライドチキン), frozen food (冷凍食品),

iced tea(アイスティー), scrambled egg (いり卵), a used car (中古車)

㊦自動詞の過去分詞と現在分詞

他動詞の過去分詞は「～された」と受動の意味を持つ→自動詞の過去分詞は受動ではなく完了の意味を表す自動詞は目的語を伴わず、受動態をつくることができないからである。例えば, fallen leaves (落ち葉), a retired professor(退職した教授)などがある。一方、現在分詞は進行中であることを表す。

◎補語になる分詞(叙述用法)

SVC (C=分詞)

直接的に名詞を修飾(限定用法)だけではなく、補語として用いる(叙述用法)

現在分詞→能動、過去分詞→受動

SVC の文型では S=C、S と C を be 動詞で結ぶことができる。

◎SVC の形で C(補語)に分詞をとることができる自動詞

①もともと補語を伴う自動詞が、補語として分詞を伴う。→補語が必要な動詞

remain / stay (～のままである) feel(～に感じる)

keep (～し続ける) look (～に見える) seem / appear (～のようだ)

②補語がなくても文が成り立つ動詞の後に、「～しながら」の意味で分詞を補語として続ける。

come (来る) walk (歩く) sit (座る) stand (立つ) lie (横になる)

SVOC (C=分詞)

O と C(分詞)の間には「O は C だ」という意味上の SV の関係が成り立つ。「O(目的語)が～している」→現在分詞を、「O(目的語)が～される」→過去分詞

SVOC (C=分詞)の形をとる動詞：～O doing / done

keep (O を CI の状態]にしておく) leave (O を C [の状態]に放つておく)

find (O が CI の状態]であるとわかる) want (O が C する「される」のを望む)

catch (O が C しているところを見つける)

◎知覚動詞+O+C (=分詞)

知覚動詞+O+現在分詞

C が現在詞→O と C の間には能動の関係

知覚動詞+O+過去分詞

C が過去分詞→O と C の間には受動の関係

知覚動詞：～O doing / done

see (O が~している[される]の見える)
look at (O が~している[される]のを見る)
watch (O が~している[される]のをじっと見る)
hear (O が~している[される]のが聞こえる)
listen to (O が~している[される]のを聞く)
feel (O が~している[される]を感じる)
notice / observe (O が~している[される]のに気づく)

③(1) I saw Tom crossing the street.

(2) I saw Tom cross the street.の違い

現在分詞→動作の**途中の一時点**、動詞の原形(原形不定詞)→**すべて**を見たこと

その動作が始まってから終わるま

知覚動詞+O+doing : 「**O が~しているのを...**」

知覚動詞+O+do 「**O が~するのを...**」

◎使役動詞+O+過去分詞

have [get]+O+過去分詞→過去分詞が表す行為をしてもらおうとする意志がある→使役の意味、ない→被害の意味

◎使役

主語に意志がある→「**O を~してもらう[させる]**」

④「彼女は髪を切ってもらった。」を× She was cut her hair.

⑤get は口語的で《米》で使われる。

◎被害

主語の意志とは関係ない→「**O を~される**」、過去分詞が強く発音

④「彼女はバックを盗まれた」を×She was stolen her bag.

⑤「突然の予期せぬ出来事」で被害を受けた場合、またそれが身体の一部である→**have よりも get** を使うことが多い。

◎make+O+過去分詞「**O を~されるようにする**」

make oneself understood (自分自身を理解してもらう)や make oneself heard (自分の声を聞かせる)の慣用表現で使われることが多い。

◎使役動詞+O+分詞のその他の用法

①have [get] +O+過去分詞 「**O を(自分で)~してしまう**」[完了]

②have [get] +O+現在分詞「**O に~させる、~させておく**」

O と現在分詞とは能動の関係、ある一定期間続く動作を暗示している。

get→「**~している状態にする**」という変化を表す。

◎使役動詞がとる形

	do	to do	done	doing
make	○	×	○	×
have	○	×	○	○

get	×	○	○	○
let	○	×	×	×

◎現在分詞

分詞が導く句が文を修飾する副詞の働きをするもの、「～しながら」「～なので」などと訳せるがどのような意味を表すかは文脈によって決まる

分詞構文は一般的に書き言葉の表現であるが、話し言葉で用いられる用法もある

1. 現在分詞を使った分詞構文

接続詞を用いた文は分詞構文で表現することができる。

I walked around the town and I took pictures.

同じ主語 同じ時

→ I walked around the town taking pictures.

①接続詞をとる ②主語をとる ③現在分詞にする

2. 過去分詞を使った分詞構文

being が省略されて、過去分詞で始まる形になることが多い。

Because it is written in plain English, this book is easy to read.

(Being) written in plain English, this book is easy to read.

3. 分詞構文の否定形

分詞の直前に not あるいは never を置く。

I just stood there because I didn't know what to do.

→ I just stood there, [not] knowing what to do.

◎分詞構文が表す意味

1. 付帯状況を表す分詞構文

「～しながら、～の状態」、このような2つの動作が同時進行である状態

付帯状況は分詞構文の中では最もよく使われる用法であり、話し言葉でも用いられる。

◎付帯状況を表す分詞構文は文末にくることが多い。

2. 時を表す分詞構文

「～する時に、～している時に」、when や while などの接続詞で書きかえ可

3. 連続した動作や出来事を表す分詞構文

「～して(それから) する」→連続的な動作や出来事、情報として重要なほうを主節に、軽いほうを分詞構文にする。and を用いて書きかえることもできる

この用法の場合、分詞構文の前にコンマが置かれることが多い。

4. 原因・理由を表す分詞構文

「～なので、～だから」→原因や理由を表す because, since, as などの接続詞で書きかえ可

◎分詞構文が「条件」「譲歩」を表すこともある。

Understanding this problem, he will change his mind. [条件]

(この問題を理解すれば、彼は考えを変えるだろう。)

Discouraged, he didn't give up his dream. [譲歩]

(落胆したものの、彼は夢をあきらめなかった。)

◎分詞構文の文頭が being の場合、being が省略され、形容詞・名詞で始まる

◎分詞構文は文中にくることも多い。

The girl, closing her eyes, listened to the music.

(その女の子は目を閉じて音楽を聞いた。)

◎接続詞+分詞構文

分詞構文は主節と分詞構文との関係が明確ではない表現である。分詞構文の意味をはっきりさせるために、**分詞の前に接続詞を置く**ことがある。

We need to speak slowly when we talk to elderly people.

→ We need to speak slowly talking to elderly people.

→ We need to speak slowly when talking to elderly people.

ただし, since や because など理由を表す接続詞はこの用法で用いられない

主語+be 動詞の省略とも考えられる場合もある

Bill hit on a good idea while (he was) waiting for a bus.

◎完了形の分詞構文

having+過去分詞→主節の動詞が表す時よりも「前」の時である場合

After I had finished my homework, I went to bed.

→ Having finished my homework, I went to bed.

完了形の分詞構文の否定形→not [never]having +過去分詞

③受動態の分詞構文が完了形の場合→**having been +過去分詞**

文頭の having been は省略することができる。

◎独立分詞構文

1. 分詞の前に意味上の主語を置く

分詞構文の主語が主節の主語と一致しない場合→意味上の主語を明確にするため分詞の前に意味上の主語を置くこと

Because it was the holiday season, the train was full

It being the holiday season, the train was full.

③being+過去分詞→being は省略されることが多い。

④there is... の分詞構文は there being、being の直後の語が分詞構文の意味上の主語だが, there はそのまま残る。

2. 慣用的な独立分詞構文

主節の主語と分詞構文の意味上の主語が違ってもかかわらず,分詞構文の意味上の主語を明示しない慣用的な独立分詞構文がある。意味上の主語が「不特定多数の人々」や「話者」などで,わざわざ明示しなくてもわかるとき

judging from [by] ~ (~から判断すると) **considering ~** (~を考慮すれば)

generally [frankly, strictly, roughly] speaking

一般的に[率直に, 厳密に, 大ざっぱに]言えば)

speaking [talking] of ~ (~と言えば) **depending on ~** (~によって)

provided [providing, supposing] (that) ..(もしならば)

granted [granting] (that) (仮に だとしても)

weather permitting (天気が許せば) **compared with [to] ~** (~と比較すると)

taking ~ into consideration (~を考慮に入れると)

3. with + O + 分詞「～が…している状態で、…したまま」→付帯状況
 with の後の名詞や代名詞は分詞の意味上の主語、
 現在分詞がくるか過去分詞がくるかは、意味上の主語と分詞が能動の関係か受動の関係かによって決まる。

◎付帯状況を表す with + (代)名詞+現在分詞/過去分詞

- with + O + 現在分詞「O が～している状態で」、
 with の後の名詞は分詞の意味上の主語、能動の関係
 with + O + 過去分詞「O が～された状態で」
 with の後の名詞は分詞の意味上の主語、受動の関係。

◎付帯状況を表す with + O + α

with + O + α → α には現在分詞・過去分詞、形容詞・副詞・前置詞句もくる

④「～しながら」の表し方

私はコーヒーを飲みながらバスを待っていた。

I was waiting for the bus drinking coffee.

「～しながら」という付帯状況を表すときに×with doing→with + O + doing

この問題のバスを待っていたのもコーヒーを飲んでいたのも「私」なので

waiting for the bus と I was drinking coffee

→分詞構文 I was waiting for the bus drinking coffee

◎分詞の構文

1. There is S doing/ done 「S が～している/されている」

There + be 動詞+主語→初めて話題に出るものの存在を知らせる表現

主語の後に現在分詞や過去分詞を続けて主語の状況を表す。

現在分詞→進行形で、過去分詞→受動態でほぼ同じ意味を表すことができる

=be ing = be 過去分詞

2. go doing 「～しに行く」

go shopping (買い物に行く), go swimming (泳ぎに行く), go fishing (釣りに行く)など。

⑤go doing の後にくる場所は「行き先」ではなく、「動作をする場所」

→方向を表す to ではなく、場所を表す in や at などの前置詞を伴う。

3. be busy (in) doing 「～するのに忙しい」
 4. have difficulty [trouble] (in) doing 「～するのに苦労する」
 5. spend O (in) doing 「～して O(時間・金・労力を費やす)」

準動詞

不定詞・動名詞・分詞の3つ→準動詞、これら3つは「動詞」が形をかえたものである。動詞と同じような性質を持ちながら、動詞にはない働きをする。動詞に準ずるものなので準動詞と呼ばれる。

◎準動詞の種類と働き

	不定詞 (to do)	動名詞 (doing)	分詞 (doing /-ed)
--	----------------	----------------	--------------------

①名詞の働き	○	○	×
②形容詞の働き	○	△	○
③副詞の働き	○	×	○(分詞構文)

①名詞の働きをする準動詞：不定詞・動名詞

名詞と同じ働きをし、文の中で主語、補語・目的語となる。

動名詞→前置詞の目的語、不定詞→×前置詞の目的語

不定詞 It's important to get enough sleep.

Her dream is to be a singer.

I hope to go to university.

動名詞 Playing basketball is fun.

My favorite pastime is watching movies.

I like listening to music.

Thank you for coming today.

②形容詞の働きをする準動詞：不定詞・分詞

不定詞と分詞は形容詞と同じ働きをし、名詞を修飾する。

不定詞 Luckily, he had friends to help him.

Firefighters entered the burning house.

Be careful of the broken glass.

Do you know the girl talking to Sally?

They have a son named Chris.

㊦動名詞には形容詞的な働きもあるが、実際は「動名詞+名詞」でひとつかたまりの名詞

③副詞の働きをする準動詞：不定詞・分詞

不定詞と分詞は副詞と同じ働きをし、文の中で動詞・形容詞・副詞や文全体を修飾

分詞が副詞の働き→分詞構文

不定詞 I got up early to catch the 6:30 train. [動詞を修飾]

The problem is easy to solve. [形容詞を修飾]

To tell the truth, I woke up late this morning. [文全体を修飾(独立不定詞)]

Judging from this picture, he is very tall. [文全体を修飾(分詞構文)]

◎動詞と同じような性質

①準動詞は目的語や補語、修飾語を伴う

準動詞(V')は、目的語(O')や補語(C'),修飾語(M')を伴うことができる

不定詞 Her dream. is to be a singer.

動名詞 Playing basketball is fun.

分詞 Do you know the girl talking to Sally?

②準動詞は意味上の主語を持つ

文の主語と準動詞の主語が異なる→準動詞(V')の意味上の主語(S')が示される

主語が同じ場合や主語が明らか→明示されない。

準動詞の意味上の主語→動詞の直前

不定詞 It's dangerous for the children to stay here.

It was kind of you to help me.

I want you to come to tomorrow's party.

動名詞 My mother doesn't like me [my] wearing short skirts.

分詞 She kept me waiting for an hour.

It being the holiday season, the train was full.

③準動詞にも完了形がある。

準動詞が完了形→準動詞の表す動作や状態が,述語動詞の表す時よりも「前の時」

不定詞 He seems to have been ill.

動名詞 She is proud of having been a nurse

分詞 Having finished my homework, I went to bed.

④準動詞には否定形がある

準動詞の直前に not や never

不定詞 She told me not to be late

動名詞 I'm sorry for not writing sooner.

分詞 I just stood there, not knowing what to do

⑤準動詞には受動態がある

準動詞は受動態をつくることができる。完了形の受動態もある。

不定詞 Children need to be accompanied by an adult.

The stone seems to have been used in the sixth century.[完了形]

動名詞 My little sister is tired of being treated like a child.

She is angry at having been called by that nickname.[完了形]

分詞 (Being) written in plain English, this book is easy to read.

◎準動詞が持つ基本イメージ

不定詞→「これから~する」

(1) I'd like to go fishing. [名詞句]

(2) He has friends to help him. [形容詞句]

(3) I turned on the TV to watch the news. [副詞句]

動名詞「実際に~する[した]」

(4) She enjoys playing tennis every weekend. [名詞句]

(5) I finished washing the dishes. [名詞句]

現在分詞「~している」

(6) Firefighters entered the burning house. [形容詞]

(7) Do you know the girl talking to Sally? [形容詞句]

(8) He was lying on the sofa, reading a book. [副詞句]

過去分詞「~された、~してしまった」

(9) There are a lot of fallen leaves in the garden. [形容詞]

(10) She bought a pair of shoes made in Italy. [形容詞]

(11) Educated in the U.S., she became an English teacher in Japan. [副詞句]

関係詞

直前の名詞(先行詞)と直後の節(関係詞節)をつなげる。関係詞節の中で

代名詞の働きをするもの→関係代名詞、副詞の働きをするもの→関係副詞)

◎関係代名詞

①先行詞が人であるかどうか

②後ろに続く節(関係詞節)の中での働き(主格・所有格・目的格)

先行詞	主格	所有格	目的格
人	who	whose	whom/who
人以外(動物・物・事)	which	whose	which
人・人以外(すべて)	that	—	that

◎主格の who, which

関係詞節の中で主語の働きをする関係詞→主格の関係代名詞

先行詞が人→who、先行詞が人以外→which、 that はどちらの場合も使える。

㊦関係詞節中の動詞の形→先行詞の人称・数に応じて形を変える。

◎目的格の whom [who], which

関係詞節の中で目的語の働きをする関係詞→目的格の関係代名詞

先行詞が人→whom か who (口語では who のほうが多く用いられる)

先行詞が人以外→which、 that はどちらの場合も使える。

目的格の関係代名詞は省略されることが多い。

㊦関係詞節の中には代名詞の目的語は残らない。

㊦目的格の関係詞節は、しばしば関係詞が省略されて S+V(+M)になる。

名詞の直後に S+V→その名詞を修飾する関係詞節だと考える

◎所有格の whose

所有格の関係代名詞は、先行詞が所有するものについて情報を加える場合に使う

先行詞が人か人以外かにかかわらず whose →whose +名詞にする

㊦先行詞が人以外→文語では of which を用いて次のように表すこともできる。

The house the roof of which is red is my uncle's.

口語では with を使った次の表現のほうが好まれる。

The house with a red roof is my uncle's

◎関係代名詞 that

that は主格・目的格の両方の関係代名詞として用いられる。

㊦that はさまざまな先行詞をとるが、人が先行詞→一般に who (m)が好まれる物が先行詞→ which より that の方が好まれる。

㊦that には所有格の用法はない。

㊦同格の that との違いに注意

◎that が好んで用いられる場合

①先行詞に the first (1 番目の), the second (2 番目の), the only (唯一の), the same (同じ), the +最上級(最も～な)などが付き、決まった1つのものを指す場合

②先行詞に all, every, any, no などの「すべて」「まったく～ない」を表す修飾語が付く場合

③everything, anything, nothing が先行詞の場合

④先行詞が「人」と「動物・物・事」の両方を含む場合:

⑤疑問詞 who が先行詞となる場合→Who who knows...となると口調が悪い

⑥先行詞が人で、関係詞節がその人の性格や状態、地位などを表す場合→先行詞は文の補語になっていることが多い。

ただし、①②の場合、「人」が先行詞のとき、関係代名詞は that ではなく、who になることが多い。

◎先行詞に付く a と the の使い分けを教えてください。

数えられる名詞は、後ろに修飾語句が付いて、それによって名詞の指すものが特定される場合→冠詞は通例 a ではなくて the

しかし、関係詞節が続くからといって、必ず the になるわけではない

(1) Rick is a student who is from Canada.(リックはカナダ出身の学生です。)

(2) Rick is the student who is from Canada.(リックがカナダ出身の学生です。)

不定冠詞の a が用いられている(1)は、「カナダ出身の学生がいる」ことを初めて述べる場合であるのに対して、定冠詞の the が付く(2)は、「カナダ出身の学生が(1人)存在する」ことをすでに相手が知っていて、「リックがその学生です」と指定する際に用いられます。

関係詞節で修飾されているからといって、自動的に先行詞に付く冠詞が the になるわけではないことに注意

◎前置詞の目的語になる関係代名詞

前置詞が後ろに残る場合、前に出る場合

先行詞が前置詞の目的語→関係代名詞は目的格

前置詞が後ろに残る場合と前置詞を関係代名詞の前に置く場合がある。

前置詞を前に置く形は文語的な表現。

㊤前置詞を関係代名詞の前に置く場合→関係代名詞を省略できない。

that は使えない。

㊤先行詞が人の場合は次のようになる。

Do you know the girl (who [whom, that]) Tim is talking to?

Do you know the girl to whom [×to who, ×to that] Tim is talking?

◎前置詞を前に置く形→文語的な表現。下にいくほど文語的

This is the CD I told you about.

This is the CD that I told you about.

This is the CD which I told you about.

This is the CD about which I told you.

◎群動詞の前置詞

look for (～を探す)などの群動詞はそのまとまりで意味を持つので、前置詞は切り離さず、後ろに残す

This is the CD(which [that]) I've been looking for.

㊤前置詞に注意

これがマイクが勤めている会社です。

This is the company (which [that]) Mike works for.

This is the company for which Mike works.

「これは会社です。」と「マイクはそこに勤めています。」の2文に分けて考えればよい、This is the company に Mike works for it.を加える、関係代名詞は名詞の代わりにしかならないので、前置詞 for を忘れてはいけない。

◎関係代名詞の what

what 「～すること[もの]」→先行詞を含んでいるので、先行詞なし

the thing(s) that [which]で書きかえることができる場合が多い。

what が導く節は名詞節で、文の中で、主語、目的語、補語になる。次のように、前置詞の目的語になることもある。

Emily thanked him for what he had done.

(エミリーは彼がしたことにお礼を言った。)

◎関係代名詞の限定用法と非限定用法

She has two sons who became actors.

She has two sons, who became actors.

限定用法：先行詞である two sons を who became actors が修飾し、「(単なる)2人の息子」ではなく、「俳優になった2人の息子」と限定している。2人のほかに別の息子いることもあり得る。関係代名詞の限定用法(制限用法)と呼ぶ

非限定用法：関係代名詞の who の直前にコンマが用いられている。

このコンマによって、文の内容はいったん完結、それに続く関係詞節→追加の説明、この用法→関係代名詞の非限定用法(非制限用法あるいは継続用法)

コンマによって文が切れているので、彼女には2人しか息子がおらず、そのどちらもが俳優になったことを表している。

㊤which も非限定用法で使われるが、that には非限定用法はない。

㊤非限定用法の関係代名詞→目的格でも省略できない。

㊤限定用法の関係詞節→発話されるとき、コンマの前で短い休止を置く。

㊤実際の英文→非限定用法でもコンマが置かれないこともあるが、コンマを付けるほうが正式

◎非限定用法の先行詞

先行詞が以下のように特定されるものの場合は非限定用法が用いられる。

つまり→コンマを用いる

①固有名詞

②〈人称代名詞の所有格(my, your, his, her など)+名詞〉

③this などの指示代名詞+名詞

㊤限定用法か？ 非限定用法か？

私はときどき、北海道で暮らすメグに電話をします。

I sometimes call Meg, who lives in Hokkaido.

先行詞が固有名詞→普通、限定用法ではなく、非限定用法

Meg は固有名詞で、すでに限定されており、それ以上限定する必要がない。

コンマを取ると限定用法になり、数人いるメグの中で「北海道で暮らすメグ」という意味になってしまう。

◎句や節を受ける非限定用法の which

I tried to climb the mountain, which I found
He said he was a lawyer, which wasn't true
She suddenly left the club, which surprised us.

1. 前の文やその一部が先行詞になる

先行する句・節・文について追加の説明を加える場合、関係代名詞 which が使われる。

2. 先行詞が句

関係詞節 which I found impossible の意味から to climb the mountain という不定詞句が先行詞。

3. which wasn't true の先行詞→he was a lawyer という節である。

4. which surprised us のは She suddenly left the club なので、前の文全体が先行詞。

⑨直前の文全体が先行詞になる場合→who を用いることはできない。

◎関係副詞

関係副詞は、関係代名詞と同様に名詞(先行詞)を修飾する場合に使われるが、
関係代名詞とは違って関係詞節の中で副詞の働きをする。

先行詞	場所を表す語	時を表す語	reason(s)	不要
関係副詞	where	when	why	how

◎関係副詞 where

関係副詞の where は場所を表す先行詞を修飾

関係代名詞 which を使って前置詞+ which の形で書きかえできる。その際、前置詞は関係詞節の中の動詞と先行詞の関係で決まる。

先行詞の省略

関係副詞の where は先行詞が省略されて用いられることもある。先行詞に the place が使われるときは関係副詞 where のほうを省略することもできる。

That's the place where the game will be held next year

That's where the game will be held next year.

That's the place the game will be held next year.

◎where の先行詞

where の先行詞は場所を表す語だけとは限らない

point (点) case(場合) situation(状況)など、状況や条件などを表す語が先行詞

⑩先行詞が場所を表す→where を使うか？

先行詞が場所を表す語だからといって関係副詞 where を使うとは限らない

次の2文の()に入る関係詞を考えてみましょう。

(1) That's the hotel () we stayed. (あれが私たちが滞在したホテルだ。)

(2) That's the hotel () we booked. (あれが私たちが予約したホテルだ。)

いずれも先行詞は場所を表す the hotel で、違いは関係詞節の中の動詞

(1)stay は自動詞→stay there [= at the hotel]のように後ろには副詞(句)

→副詞の働きをする where が入ります。

(2)book (～を予約する)は他動詞→book it [=the hotel]のように目的語

(代)名詞の働きをする目的格の関係代名詞 which か that

目的格なので省略することもできます。

このように、関係副詞と関係代名詞のどちらを使うかは、関係詞が関係詞節の中でどのような役割をしているか（副詞の代わりをしているのか、代名詞の代わりをしているのか）によって決まります。

◎関係副詞の代用をする that

関係代名詞だけでなく、関係副詞 where, when, why, how の代わりとして that を用いることもある。ただし、この that は省略されることが多い。

Ann told me the place where she was staying
= Ann told me the place (that) she was staying.

◎関係副詞 when

関係副詞の when は時を表す先行詞を修飾

主節と関係詞節を分けて考えると、when は時を表す副詞句を置きかえたもの
when は関係代名詞 which を使って「前置詞+ which」の形で書きかえできる。

前置詞は関係詞節の動詞と先行詞の関係で決まる

先行詞の省略

関係副詞の when は先行詞なしで用いられることがある。また、先行詞を残して、関係副詞 when を省略することもある。

Now is the time when you should start it.
= Now is when you should start it.
= Now is the time you should start it.

㊦先行詞に関係詞節を続けると主語が長くなってしまう場合、先行詞と関係詞が離れて使われることがある。この場合、関係詞を省略することはできない。

◎関係副詞 why

関係副詞の why は the reason(s) を先行詞とし、理由を表す節を導く、the reason(s) は省略されることもある。

関係代名詞 which を使って「前置詞(for) + which」の形で書きかえできる

先行詞の省略

That is the reason why (そういうわけで…)の意味で、That's why を用いる

先行詞の the reason(s)を残して、why が省略されることもある。

This is why(こういうわけで…)という形も使われる。

That's the reason why I was late.
= That's why I was late.
= That's the reason I was late.

㊦This [That] is because 「これ[それ]は ・だからです」

This [That] is why …とは原因と結果が逆になることに注意。

◎関係副詞 how

関係副詞の how は先行詞なしで用いられ、関係詞節全体で「~**する方法**[やり方]」→名詞節、

関係副詞の how は **That's how**(そのようにして…)→事のなりゆきや方法

This is how(このようにして…)

㊦how の代わりに the way, the way in which を使って同じ意味を表す

That's how the accident happened.

= That's the way the accident happened.

= That's the way in which the accident happened.

㊦関係副詞の how には the way の意味が含まれている→×the way how

◎関係副詞の非限定用法

関係副詞の非限定用法

関係副詞の where と when には非限定用法があり,先行詞に追加の説明を加える。why と how には非限定用法はない。

非限定用法の関係副詞 where 「…、そしてその場所で～」

非限定用法の関係副詞 when 「…、そしてその時～」

㊦非限定用法の先行詞は,特定の場所や時である場合が多い。

◎名詞節を導く複合関係代名詞「～ならどんなものでも」

関係代名詞に-ever が付くと「～ならどんなものでも」→名詞節を導く。

先行詞を含むことに注意

複合関係代名詞	意味	主な書きかえ
whoever	～する人は誰でも	anyone who～
whichever	～するものはどれ[どちら]でも	any one [ones] that～ either (one) that～
whatever	～するものは何でも	anything that ～

目的格の場合→whomever (～する人に[を]誰でも)という表現もあるが,口語では whoever を用いるのが一般的である。

㊦whichever は選択肢が前提にあり、「その中からどれでも」を表す。

㊦whichever と whatever は直後に名詞を伴って形容詞的に用いられることがある。この用法を複合関係形容詞と呼ぶ。

◎副詞節を導く複合関係代名詞:「～しようとも」

複合関係代名詞が副詞節を導き,「～しようとも」→譲歩の意味

譲歩の用法は(no matter +疑問詞)で言いかえでき,こちらのほうが口語的

複合関係代名詞	意味	主な書きかえ
whoever	～[誰が誰を]～しようとも	no matter who
whichever	どれ[どちら]が[を]～しようとも	no matter which ～
whatever	何が[何を]～しようとも	no matter what

目的格の場合は whomever という表現もあるが,口語では whoever を用いるのが一般的である。

㊦動詞の前に may が使われることがあるが,文語的である。

㊦副詞節を導く whichever, whatever は直後に名詞を伴って形容詞的に用いられることがある。(no matter +疑問詞)の形も可能。

◎複合関係代名詞の名詞節・副詞節の見分け方

「～ならどんなものでも」→名詞節,「～しようとも」→副詞節

名詞節→文の主語や目的語などになるため,欠かすことがない要素ですが,副詞節はなくても文が成り立つ。その節がなく文が成り立つかどうかを確認する

◎複合関係副詞「～する時はいつでも」

副詞節を導き、接続詞のように使われる。

複合関係副詞	意味	主な書きかえ
whenever	～する時はいつでも	any time
wherever	～するところはどこへ [で]でも	(at) any place ~

◎複合関係副詞「いつ～しようとも」

譲歩を表す、副詞節を導き、接続詞のように使われる。

複合関係副詞	意味	主な書きかえ
whenever	いつ～しようとも	no matter when
wherever	どこへ[で]～しようとも	no matter where
however+形容詞[副詞]	どんなに～でも	no matter how+形容詞 [副詞] ~

◎形容詞や副詞が付かない (however +S+V)の形は「どんなふうに～しても」

◎関係詞の注意すべき用法

関係代名詞+I think：関係代名詞の直後に I think, I believe, I know, I hear, I suppose などが続く場合

I think などをいったん()に入れて考えるとわかりやすい。

二重否定：2つの関係詞節が1つの先行詞を修飾すること「～の中で～する…」→大きく限定してから細かく限定する。1つめの関係代名詞は省略することができるが、2つめの関係代名詞は省略できない。

関係形容詞：what の後に名詞が続いて「…するだけの～」「…するすべての～」

名詞を修飾して形容詞の働き、all the ~ that で書きかえできる。

◎few や little が入ると、「わずかではあるが」の意味が加わる。

◎which も関係形容詞として働く、「前置詞+which+名詞」

～ of how [which]の非限定用法

all, most, some, many, both, neither など数量を表す語と共に用いられることが多い。その場合は「そのうちの～は…だ」

that は非限定用法では使えない。

◎関係詞を使った構文

what is called 「いわゆる」

what we [you, they] call という形でも用いられる。

what S used to be 「以前[かつて]の S(の状態)」

what S was で「昔の S」 what S is で「今の S」

what with A and B 「A や B の理由で」

what with all A and B, what with A and all などの形もある。

A is to B what C is to D 「A と B の関係は C と D の関係と同じだ」

A is what C is to D to B の what C is to D を後ろに回したもの。

such ~ as 「…するような～」

as は主格の関係代名詞として働く。

the same ~ as... 「…するのと同じ～」

as は、目的格の関係代名詞として働く。

as is often the case with ~ 「～にはよくあることだが」

as は関係詞の非限定用法のように文全体を先行詞とし、「～するように」という意味を表すことができる。この場合、as の節は主節の前に置くことができる。

as is usual with (～にはいつものことだが)という表現もある。

more ~ than 「…する以上の～」

than は関係代名詞と同じように関係詞節の主語や目的語の働きをすることができる。

more ~ than S can...は文字通りには「S が…できる以上の～」を表すが、「S が…できないほどの～」という否定の意味を含んで訳すと自然な日本語になる。

no ~ but... 「…ない～はない」

but は no や few などの否定を伴った先行詞の後に付いて、二重否定(…ない、はない)を表す関係代名詞として用いられることがある。ただし、口語ではあまり用いられない。

= no ~ that don't

句と節のまとめ

2語以上の語が続いて「主語＋動詞」を含まない語のまとまり→句

「主語＋動詞」が含まれる語のまとまり→節

句や節には、文の中で「名詞」の働きをするもの、「形容詞」の働きをするもの、

「副詞」の働きをするものがある。その働きによって、句は「名詞句」「形容詞句」、節は「名詞節」「形容詞節」

「副詞節」に分けられる。

◎句の種類と働き

①名詞句：文の中で主語・補語・目的語・前置詞の目的語

②「名詞句」「形容詞句」「副詞句」は文中の働きの上での分類であり、「不定詞句」や「動名詞句」などは形の上での分類である。

③形容詞句：名詞 代名詞を後ろから修飾したり、補語になったりする

④副詞句：動詞や形容詞、その他の副詞、文全体を修飾

◎節の種類と働き

①名詞節：文の中で主語・補語・目的語・前置詞の目的語、同格の用法もある

②形容詞節：形容詞の働きをする。関係代名詞や関係副詞が使われ、名詞・代名詞を後ろから修飾

③副詞節：副詞の働きをし、他の節(の動詞)を修飾、when, if, because などの接続詞や複合関係詞が使われる。

◎主節と従属節[従位節]

節には主節と従属節という分けがある。

主節→「文の S+V」が含まれる節

従属節[従位節]→主節に従属している節で、「S' +V'」が含まれる。名詞節・形容詞節・副詞節の**見分けが必要なのは従属節**

◎2つの節が対等な関係で結び付いているとき、それぞれの節を**等位節**という

比較

比較変化

多くの形容詞や副詞は、原級(形容詞・副詞のそのままの形)だけではなく、

比較級「より～、もっと～」、最上級「最も～」に変化

比較変化には規則変化と不規則変化がある。さらに、規則変化には-er,-est 型と more, most 型がある。

◎規則変化：-er, -est 型

	原級	比較級	最上級
①1 音節の語	tall (背の高い) fast (速い)	taller faster	tallest fastest
②2 音節の語の一部 (-y, -er, -le, -ow で終わる語)	eas-y(容易な) clever (利口な) sim-ple(単純な) narrow (狭い)	easier cleverer simpler narrower	easiest cleverest simplest narrowest

㊦音節とは、ひとまとまりに発音される最小の単位。核となる母音の前後に子音を伴うことが多い。多くの辞書では見出し語の音節を、・で区切って示している。母音の数＝音節の数

-er, -est の付け方

原級の語尾	作り方	原級	比較級	最上級
下記以外	-er, est を付ける	old(年をとった) fast(速い)	older faster	oldest fastest
-e	-r, -st を付ける	large (大きい) wise (賢い)	larger wiser	largest wisest
子音字+y	y を i に変えて -er, -est を付ける	happy(幸せな) easy (容易な)	happier easier	happiest easiest
短母音+1 子音字	子音字を重ねて -er, -est を付ける	hot(暑い) big (大きい)	hotter bigger	hottest biggest

㊦「子音字」とは、母音字 i, e, a, o, u 以外のアルファベットの事。

「短母音」とは短く発音する母音で、/ɪ/, /e/, /æ/, /ʌ/, /ɑ/, /u/

(live / lɪv/ の /ɪ/ は短母音、leave / li:v/ の /i:/ は長母音)

◎規則変化: more, most 型

	原級	比較級	最上級
①2 音節の語の多く	care-ful (注意深い) fa-mous (有名な)	more careful more famous	most careful most famous
◎3 音節以上の語	beau-ti-ful (美しい) im-por-tant (重要な)	more beautiful more important	most beautiful most important
③語尾が-ly の副詞	slowly (ゆっくり) quickly (速く)	more slowly more quickly	most slowly most quickly

more (比較級), most (最上級) を付ける。

㊦early は形容詞・副詞いずれの場合で用いられても、-er,-est 型の変化をする

early-earlier-earliest

㊦po-lite(丁寧な), com-mon (普通の)→原級+-er, -est の形も可能だが、

more, most を使うほうが一般的、angry や clever は more ～, most ～も可能。

◎不規則変化

原級	比較級	最上級
good ㊦よい	better	best

well	☞健康で	☞上手に		
bad	☞悪い			
badly		☞ひどく	worse	worst
ill	☞病気で	☞悪く		
many	☞多数の		more	most
much	☞多量の	☞とても		
less	☞少量の	☞少し	little	least

㊦ few は few-fewer-fewest と変化する。

less, least は「less + 形容詞[副詞] + than ~」や「the least + 形容詞[副詞]」で「程度が低い」ことを表す

◎比較級・最上級が2種類あるもの

意味によって比較級・最上級の形が異なるものがある。

原級	比較級	最上級
far	☞遠い [距離] ☞それ以上の [程度]	farther furthest
late	☞遅い [時間] ☞後の [順序] ☞後で [順序]	later latter last last
old	☞年をとった、古い ☞(兄弟のうちで)年長の	older elder oldest eldest

㊦ farther と further の発音の違いに注意 (ɑ と ə)

㊦ later と latter の発音の違い注意 (eɪ と æ)

elder, eldest は兄弟姉妹での年長を表す elder brother (兄), eldest brother (長男)

㊦ 《米》では older brother, oldest brother を使う。ただし, 《英》《米》共に, 兄と弟, 姉と妹を区別せずに, 単に brother, sister と言うことが多い。

◎原級を使った比較表現 A...as+原級+as B

- ・ A と B が同程度(A=B)であること

A as + 原級 + as B 「A は B と同じくらい」2つの物事や人が形容詞[副詞]の性質を同じくらい備えていることを表す。

原級の文のつくり方

①「同じくらい」as[副詞] ②「~のように」の as[接続詞]

③2番目の形容詞は必ず省略する

④後ろの as 以下の be 動詞が主語の動詞と一致→省略可能

㊦ 2つめの as の後が代名詞1語の場合→口語では主格よりも目的格を用いる

副詞の比較表現も同じように考えることができる。

前に出た動詞を受ける do [does, did] を代動詞という。

- ・ A が B に達しない (A<B) こと

A not as + 原級 + as B 「A は B ほど~ではない」

as + 原級 + as を not で否定すると「~ほど...ではない」という意味になる。

㊦ 否定文→1つめの as の代わりに so が使われることがある。ただし, 口語では as のほうが一般的。肯定文では so は使われない。

副詞の場合も同様に考えることができる。

◎形容詞+a/an+名詞の語順

原級を使った表現では、2つの as の間に名詞を伴う形容詞がくることがある。

He will be as great a man as his father.

1 つめの as は副詞なので名詞を修飾することができない(×as a great man)。

従って, as に引っ張られて形容詞の great が前に出る。ほかに **too, so, how** など副詞なので、**形容詞+a/an+名詞**の語順になる

◎as many+複数名詞+as B 「(数が)B と同じくらいの～」

㊦形容詞(many / much) +名詞をひとかたまりで考える。

㊦「(量が)B と同じくらいの～」 as much +数えられない名詞+as B
much の後には数えられない名詞がくる。

◎X 倍を表す

2つの物事や2人の人を比べて、「一方がもう一方の 倍～だ」という場合(as+原級+as)の前に twice, half, X times などの倍数を置いて表現する。

倍数の表し方 ... as+原級+as B

half (B の半分の～) **X times** (B の X 倍の～) **one-third** (B の 3 分の 1 の～)

twice (B の 2 倍の～) **one quarter [one-fourth]** (B の 4 分の 1 の～)

two-thirds (B の 3 分の 2 の～)

㊦「B の X 倍～」を比較級を用いて「**X times+比較級+than B**」のように表せる

㊦「2 倍」を表すとき, as+原級+as のときは twice を, 比較級を用いて表すときは two times を用いるのが一般的。

㊦twice や分数など倍数表現の後に, size (大きさ)などの名詞を使って「～の X 倍だ」を表すこともできる。

倍数表現+the +名詞+ (of～))の形で使われる名詞

size (大きさ) **height** (高さ) **number** (多さ, 数)

depth (深さ) **length** (長さ) **weight** (重さ)

㊦as の直前に置く語

比べているものが「ちょうど同じだ」と言いたいときは最初の as の直前に **just**(ちょうど)や **exactly** (まったく)を置く。「ほとんど同じ、だいたい同じ」である場合には, **about**(およそ), **almost [nearly]** (ほとんど)などを用いる。

◎比較級を使った比較表現 A …比較級+than B

・ **A が B より勝っている**(A > B)ことを表す

何かと何かを比べて, 何らかの基準で一方が勝っていることを表す場合

A 比較級+than B 「**A は B よりも～**」

㊦than の後に代名詞だけを置く場合は(as +原級+as)の場合と同様に口語では主語よりも目的格を使うことが多い。

・ **A が B より程度が低い**(A < B)ことを表す

比べる相手よりも形容詞や副詞の表す程度が低い

「**A は B ほど～ない**」 A less +形容詞[副詞]+than B

=A not as +形容詞[副詞]+as B や B…比較級+than A

㊤この表現では less の後に原級を置く

・A が B と同程度かそれ以下($A \leq B$)を表す

A not+比較級+than B 「A は B よりも～ということはない」

㊤more の位置に注意

彼は私より漫画をたくさん持っている。

He has more comic books than me [I (do)].

more と comic books の位置を逆転させてはいけない。形容詞+名詞をひとかたまりで考える

㊤繰り返しを避ける代名詞

前に出た名詞の繰り返しを避けるため, that, those, one, ones を代用する。

「that = the +単数または数えられない名詞」, 「those = the +複数名詞」, 「one = 単数名詞」, 「ones = 複数名詞」を表す

㊤数えられない名詞の場合は、このような代名詞は使えない。

㊤2つの差が大きいことを表す

A...比較級+than B を強調→「A は B よりもずっと[はるかに]～」

比較級の前に much あるいは far を置く、a lot, even, still を使っても同じように強調の意味を表すことができる。

㊤比較級を強めるときに very を使うことはできない。

㊤(more +数えられる名詞)を強める場合は much ではなく many が使われる。

(more +数えられない名詞)を強める場合は much を使う。

㊤2つの差が小さいことを表す

「A は B よりも少し～」を表す→比較級の前に a little や a bit を置く。

㊤2つの差を具体的な数値で表す

「A は B よりも…だけ～」と具体的な数値を表すとき→比較級の前に「数詞+単位」を置く。

「by+数詞+単位」を使って同じ意味を表すことができる。この by は「～差で」の意味を表す。

㊤句と句、節と節の比較の対象

比較表現では、比較される2つの事柄は文法上対等な関係となる。

㊤比較される2つの事柄は互に対応したものでなければならない。日本語の「実際」を the fact などにしてはいけない。→見かけ

㊤最上級を使った比較表現 A...(the)+最上級

・3つ以上のものの比較でいちばんを表す

「A はいちばん[最も]～」を表す場合は、最上級を用いて A...(the)+最上級

特定のグループの中でいちばんのものは1つに特定されるので最上級には the を付ける

副詞の最上級では the は付けても付けなくてもよい。しかし、比較の範囲が of など示されている場合には the を付けることが多い。

㊤比較の範囲や対象は〈in+場所・範囲を表す単数の語〉あるいは〈of+同類を表す複数の語〉で表す。

比較する範囲を関係代名詞節を使って表し、「…する[した]中で最も~という」

・いちばん程度が低いことを表す the least +形容詞[副詞]「最も~でない」

◎the+序数+最上級+名詞

「X番目に~」→最上級の前に(the + 序数)を置き「the+序数+最上級+名詞」

◎by far the+最上級

最上級に「断然~」という強調の意味を加える→最上級の前に by far や much を置いて「by far [much] the+最上級」の形になる。

㊤最上級の前に very を置いた(the very+最上級+名詞)の形で「まさに~」と強調することもできる、the の位置に注意。

most を使った最上級には使うことができない。

比較級・最上級を強調する表現

比較級 much far a lot [口語的] even still

最上級 by far much (the) very

◎one of the+最上級+複数名詞

「最も~な…の1人[1つ]」→one of the+最上級+複数名詞

「(複数の特定の) の中の1つ」を意味するので、最上級は the や所有格を伴い、名詞は複数名詞となる。

◎no (other), any other を使った表現

・No (other)+単数名詞...as +原級+as A「A ほど~な…はない」

other は省略されることもある。

㊤No (other)の後ろには単数名詞がくる。

㊤比較するものが同じ種類のものでないとき、other は付けない。

・No (other)+単数名詞...比較級+than A「A よりも~な…はない」

比較級を使った表現は「~を超えるものはない」という意味なので「同程度の大きさのものはある」という可能性は残される。

・A...比較級+than any other+単数名詞「A はほかのどの…よりも~」

◎nothing anything を使った表現

・Nothing...as+原級+as A「A ほど~なものはない」

比較するものが漠然とした「物」の場合 (no (other) +単数名詞)ではなく nothing を使う。

・Nothing ...比較級+than A「A よりも~なものはない」

「~を超えるものはない」なので、「同程度のものもある」という可能性は残る

・A...比較級+than anything else「A はほかの何よりも」

比較するものが漠然とした「物」の場合. (any other +名詞)ではなく anything else を使う

◎nobody, anybody を使った表現

・Nobody [No one]... as +原級+as A「A ほど~な人はいない」

比較するものが漠然とした「人」の場合(any other +名詞)ではなく nobody を使う。nobody の代わりに no one

を使ってもほぼ同じ意味になる。

・ **Nobody [No one] ...比較級+ than A** 「A よりも～な人はいない」

「～を超える人はいない」なので、「同程度の人はいる」という可能性は残る

・ **A …比較級+ than anybody [anyone] else** 「A はほかの誰よりも～」

比較するものが漠然とした「人」の場合、「any other + 名詞」ではなく anybody [anyone] else を使う。

㊦「誰よりも～」の表しかた

ボブはクラスで誰よりも頭がいい。

Bob is more intelligent than anyone else in our class.

than の後は anyone ではなく, anyone else になることに注意

日本語では「クラスで誰よりも」だが、厳密に言えば「クラスの中でボ

ブ以外の誰よりも」になるので, else が必要

「いちばん頭がいい」と考えて、最上級で表したり, Nobody を主語にして表すことも可能。

=Bob is the most intelligent in our class

=Nobody [No one] is as intelligent as Bob (is).

=Nobody [No one] is more intelligent than Bob (is).

㊧「人」以外「物」の場合でも anyone else と同様に anything else を用いる

㊨than ではなく to を用いる比較

比較の対象を表すときに than ではなく to を使って比較表現をつくる形容詞がある

・ **be superior to** ～ 「～より優れている」

㊩to は前置詞なので, to の後に人称代名詞がくる場合は必ず目的格にする。

㊪**be inferior to** ～ 「～より劣っている」

㊫「～よりずっと優れている」と強調するときは superior の前に much, farなどを置く。

・ **be senior to** ～ 「～より地位が上だ」

㊬**be junior to** ～ 「～より地位が下だ」

㊭**be senior/junior to** ～を「～より年上[年下]だ」の意味で使うこともあるが, be older/younger than ～で表すのが普通。

・ **prefer A to B** 「B より A を好む」

㊮**be preferable to** ～ 「～より望ましい」

㊯絶対比較級

比較の対象を明示しないで、漠然と程度が高いことを示す比較級の用法

具体的な何かと比べているわけではないので than ～の形をとらず, much を伴うこともない。the younger generation (若い世代) higher education (高等教育), the higher animal (高等動物), the upper class(上流階級)などがある。

㊰比較の対象を明確に示さない形で最上級を用いて「非常に、とても」を意味する用法→絶対最上級、この用法では最上級の前に the を付けない。

㊱ **the+比較級+of the two** 「2つの…のうち,より～なほう」

比較されるものが2つなので比較級を使うが、「より～なほう」は1つに特定されるため、比較級の前に **the** が付く。

「3つ以上の中でいちばん～」という場合は最上級を使う。

◎同一人物・物の中での比較

ほかの人や物との比較ではなく、同一人物・物の中での比較は形容詞の最上級でも the を付けない。「ほかの人と比べて～」ということを示しているのではなく、「**私の中でいちばん～**」ということを示している。

⑧「ほかの人や物と比べていちばん」の場合は the を付ける。

◎the+最上級+名詞

the+最上級+名詞「**最も～な** **でさえ[すら]**」→譲歩の意味を表すことがある。**even** を補って考えると意味をとりやすい。

◎比較を使った構文

●原級を使った構文

1. **as ~ as possible** 「できるだけ～」

= as ~ as S can でも表すことができる。主節が過去形の場合は could

2. **as+原級+ as ever** 「相変わらず～, 普段と変わらず～」

as +原級+ as ever は「これまでと同じくらい～」から「相変わらず～」になる。

as+原級+a/an+名詞+as ever lived 「これまで生きたどんな人と比べても～」から「きわめて～」という意味になる場合もある。

3. **as many [much] as+数詞+名詞** 「(数[量]が)…もの～」

as many as を 数詞+名詞の前に付けて数が多いことを強調する。

量が多いことを強調する場合は as much as にする。

④時間や頻度を示す表現を「as+原級+as」の形で用いて「…も～」を表す

④as many [much] (～) 「同数[同量](の～)」

in as many lines は、先行する 10 と同じだけの数の行数を意味する。

4. **as good as+形容詞 [分詞]** 「ほとんど～と同様、～も同然」

as good as の後に必ずしもよいことがくるとは限らない

5. **not so much A as B** 「A というよりはむしろ B」

④B rather than A や rather B than A, more (of) B than A も同じ意味

A と B の位置に注意。

④A と B に形容詞がくるときは、-er 型の規則変化をする語でも (more +形容詞+than +形容詞) の形になる。

6. **without so much as+名詞[動名詞]** 「～さえしないで」

④not so much as do 「～さえしない」

●比較級を使った構文

7. **比較級+and+比較級** 「ますます～, だんだん～」

more を付けて比較級をつくるもの→more and more +形容詞[副詞]

「ますます多くの」の場合→more and more+名詞

④**less and less** ～ 「ますます～ない」

8. **the +比較級+SV..., the+比較級+SV～**

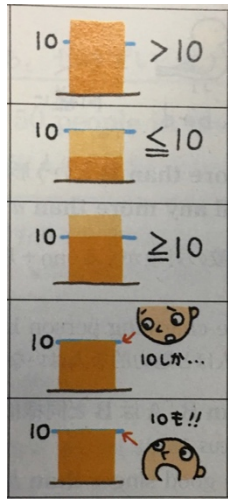
「…すればするほど, ますます～する」

the は副詞で、前の the は「～すればするほど」、後ろの the は「それだけますます～」を表している。
more + 形容詞[副詞]や形容詞の比較級+名詞の場合→more と形容詞[副詞]、形容詞と名詞を離さないようにする。

③比較級の後の主語と動詞が省略されることもある。

9. (all) the+比較級(+for…)「(…のために)それだけ～,ますます～」
the→「それだけいっそう」を表す副詞。(all) the +比較級の後に, for や because などの理由を表す句や節が続くことが多い。
10. none the less (for…)「それでもやはり, …にも関わらず」
none the less の後には, for や because などの理由を表す句や節が続くことが多い。
11. (and) what is more「その上, さらには」
さらに興味深い内容を付け加えるときに使う。what is more は普通, 時制の一致は適用されない。
③what is worse「さらに悪いことには」
what is worse は主節の時制が過去の場合, what was worse となる
12. know better than to do
「(～するほど)愚かでない, 分別がある(から～しない)」
know better で「より分別がある」than の後ろには to 不定詞が続くことに注意。
13. more than+数詞+名詞「～よりも多い」
more than の後の数字は含まれない more than 10 dollars は「10 ドルちょうど」は含まれず, 「10 ドルより多い」を意味している。
日本語の「以上」はその数を含み、more than とは異なる。
less than+数詞+名詞「～よりも少ない」
14. not more than+数詞+名詞「多くても～, せいぜい」
=at most =not more than
数量の上限を表す表現である、not が文全体の内容を打ち消している。
15. not less than +数詞+名詞「少なくとも」= at least
数量の下限を表す表現である。not が文全体の内容を打ち消している。
16. no more than +数詞+名詞「たったの～, わずか～しか」= only
no は more (多い)のまったく反対であることを表し、話し手の感情を伴う、no more than ~(多いなんてとんでもない→～しかない)
17. no less than+数詞+名詞「～もの, ～ほども多く」=as much as=as many as
no は less (少ない)のまったく反対であることを表し、話し手の感情を伴う
no less(少ないなんてとんでもない→～もある)

more than 10 (10 よりも多い)	=over	
not more than 10 (多くても 10)	= at (the) most	
not less than 10 (少なくとも 10)	= at least	
no more than 10 (10 しか)[思ったより少ない]	=only	

no less than 10 (10 もの)[思ったより多い]		 <p>The strip shows a bar chart with a value of 10. The first panel shows the bar is taller than the 10 mark, labeled > 10. The second panel shows the bar is exactly at the 10 mark, labeled ≤ 10. The third panel shows the bar is shorter than the 10 mark, labeled ≥ 10. The fourth panel shows the bar is exactly at the 10 mark, labeled 10しか... (only 10...). The fifth panel shows the bar is exactly at the 10 mark, labeled 10も!! (even 10!!).</p>
	=as many [much] as	

◎実際には,not more [less] than +数詞+名詞=no more [less] than +数詞+名詞

18. A ...no +比較級+than B

「A は B と同じくらい~だ」「は B ほどの~しかない」

形容詞の前に no が付くと,まったく反対の意味(big⇔small)を表す。

◎no better than B 「A は B 同然だ」

19. no more ~ than B 「A は B でないのと同様に~でない」

than 以下の B で明らかに間違っている例を引き合いに出して, A も「同様にそうではない」ことを表す。B →否定形ではなく肯定形になることに注意

◎A...not ~ any more than B という形になることもある。

◎than 以下に単なる比較の対象がくる(no +形容詞の比較級+名詞+than ~)と混同しないように注意する。

◎A...no less ~ than B 「A は B と同様に~だ」 no less は否定語が 2 つ続き,肯定の意味になる(→Focus 169)。

20. much [still] less 「まして~ない」

否定文の後に用いる。

21. more or less 「1 多かれ少なかれ 2 ほとんど,事実上」

22. sooner or later 「遅かれ早かれ,いつかそのうちに」

●最上級を使った構文

23. at (the) most 「多くても,せいぜい[最大でも同じかそれ以下]」

◎at least 「少なくとも[最小でも同じかそれ以上]」

24. at best 「最高でも,せいぜい」

◎at worst 「最悪の場合」

25. at one's best 「最高の状態で」

26. make the most of ~ 「~を最大限に利用する」

make the most of ~は「[有利な条件]を最大限に利用する」で,「[不利な条件]を最大限に[できるだけ]利用する」は make the best of ~になる。

仮定法

直説法：実際に起こり得ること(現実と想像との距離はゼロ) →現在形

If it rains tomorrow, I will stay home.

仮定法：現実に反すること(現実と想像との距離がある) →過去形

If I lived near the sea, I could go swimming every day.

実際→I don't live near the sea, so I can't go swimming every day.

英語の場合は現実か想像かを区別し、「想像である」ことを時制をずらして表現する。このときの動詞の形→仮定法。なお、実際に起こり得ることを述べるときに使う動詞の形→直説法

㊤事実かどうか,起こり得るかどうかは話し手の判断次第である。

when や if など,時や条件を表す副詞節の中では,未来のことであっても現在形、if 節には過去形、主節には助動詞の過去形

仮定法の過去形は時間的な距離ではなく、「現実」と「想像」との距離を表している。

◎現在のことを表す仮定法(仮定法過去)

「もし(今)~ならば…だろうに」→現在の事実と違うこと,実際には起こり得ないことを述べる場合,過去形が使われる。形は過去であるが現在のことを表す。仮定法過去の形は次のようになる。

① if 節の動詞には過去形を用いる be 動詞の場合,普通は were になる。

②主節には助動詞の過去形が使われる。would(…だろうに),could(…できるのに),might(…かもしれないのに)

仮定法→現在形の否定文を使って,書きかえできる

㊤《英》では主節に should が使われることもある。文語的表現。

㊤仮定法の文、1 人称, 3 人称単数の場合→口語では was が用いられる

㊤if 節は後ろに置くこともできる。

◎過去のことを表す仮定法(仮定法過去完了)

「もし(あの時)~だったなら,…だっただろうに」→過去の事実と違うこと,実際には起こらなかったことを述べる場合、時制を過去よりさらに過去にずらして,過去完了形が使われる。後悔や弁解などを表すことが多い。

①if 節の動詞は過去完了形(had +過去分詞)を用いる。

②主節には would [could, might]+have +過去分詞がくる。

過去形の否定文を使って,「現実」を表せる

㊤仮定法の時制イメージ

現実と想像との距離を過去形という手段で表す仮定法は,現実の時制より 1 つ過去にずらしたものを使う。現在→過去形、過去→過去完了形

◎if 節と主節で時制が異なる場合

if 節→仮定法過去完了・過去の事実と違うこと、

主節→仮定法過去・現在の事実と違うこと

「もし(あの時)~だったなら,(今)…だろうに」

if 節→「あの時」then、主節→「今」now などの時を表す副詞を伴う

㊤if 節は仮定法過去,主節は仮定法過去完了

if 節→過去も現在も変わらず事実ではないこと、主節→過去の事実と違うことを述べる→if 節は仮定法過去,主節は仮定法過去完了になる。

「私があなたではない」というのは過去も現在も変わらず事実ではないことなので,主節が仮定法過去完了(過去の事実と違うこと)であっても,if I were you と過去形で表すのが普通。主節の時制に合わせた if I had been you が使われることもある。

◎未来のことを表す仮定法

・ If S' were to+動詞の原形「**仮に~するとしたら**」

実現の可能性がゼロの場合から,実現の可能性がある場合まで、話者のさまざまな想定を表す

・ If S' should +動詞の原形「**万一~すれば**」

実現可能性が極めて低い場合、「**まずあり得ないだろうが**」という意味が含まれる。

㊤実現の可能性がまったくない仮定には使わない。

◎wish+仮定法過去

「**~であればよいのに**」→現在の**事実**に反したり**実現が困難な願望**

I wish に続く節の時制を過去にずらすことで、「現在の事実とは異なる」ということを表している。この表現には「残念だ」という話し手の気持ちが含まれる

㊤wish の後に続く節に could や would が使われることがある。

◎wish +仮定法過去完了

「**~だったらよかったのに**」→過去において実現しなかったことへの願望

◎I wish I could go.と I hope I can go.の2つの文の違い

行くことができる可能性の高さが違う

wish と hope はどちらも「望む」という意味ですが, wish+仮定法→「**実現困難な願望**」、hope+直説法→「**可能性がある**と信じている願望」

㊤過去完了形は時制の「ズレ」を表す

wish を使った仮定法→願う時点と願望の実現の時点が「同時」→wish に続く節では過去形(仮定法過去)、願う時点よりも願望の実現の時点が前の場合には,時制の「ズレ」を表すのに, wish に続く節では過去完了形(仮定法過去完了)

時制が同時→**過去に対する願望でも続く節では過去形**

時制にズレ→**過去完了形**

◎as if+仮定法過去

「**まるで~のように**」→事実とは異なる状況や空想

◎as if+仮定法過去完了

「**まるで~したかのように**」→主節の時制よりも前の事実とは異なる状況・空想

㊤その他 as if の用法

(1) as if は **as though** を用いても同じ意味を表すことができる。

(2) as if の後に to 不定詞を置き,**as if to do** の形もある。

口語では as if の代わりに like が用いられることもある。

(3)口語では **as if [though]** の後に直説法を用いることがある。特に,話し手が実際に起こり得ると考えている場合には直説法となることが多い。

㊤過去完了形は主節と as if の節の時制の「ズレ」を表す

wish を使った仮定法と同様に, as if を使った仮定法では,主節と as if の節の時制の組み合わせは以下のようになる。

(1) He looks as if he were ill.[仮定法過去]

「今」病気であるように「今」見える。(同時)

(2) He looks as if he had been ill. [仮定法過去完了]

「過去」に病気であったように「今」見える。(ズレ)

(3) He looked as if he were ill. [仮定法過去]

「過去」に病気であるように「過去」に見えた。(同時)

(4) He looked as if he had been ill. [仮定法過去完了]

「過去のさらに過去」に病気であったように「過去」に見えた。(ズレ)

時制の「ズレ」を表すために, as if の節では**過去完了形**が用いられる。

◎if の省略(倒置)

if が省略→(助)動詞+主語の語順(疑問文と同じ語順)

書き言葉で用いられ,仮定の意味が強調

㊤if が省略されるのは, were, should, 〈had+過去分詞〉の場合が多い。

if を使わない仮定法①:副詞(句)で仮定を表す

・ **without + 名詞** 「~がなければ」

without は「~がない」という意味で, 文頭で(代)名詞と共に用いることで if 節と同じ働きをする。主節の動詞が仮定法過去→「(今)~がなければ」、仮定法過去完了→「(あの時)~がなかったなら」

㊤without は前置詞なので,後ろに節は置けない。without~の部分には動詞が含まれないので,現在のことか過去のことかは主節の時制から判断

㊤if it were not for ~でも同じ内容を表すことができる

㊤but for ~も同じ意味を表す。文語的表現

・ **with + 名詞** 「~があれば」

with⇔without、「(今)~があれば」ということを表す

主節が仮定法過去完了→「(あの時)~があったなら」

・ **otherwise** 「そうでなければ」

直前に述べられている事実と反する仮定を表す主節が仮定法過去→「(今)そうでなければ」、仮定法過去完了→「(あの時)そうでなければ~しただろう」

㊤実際に起こり得ることを表す場合は, otherwise の後に直説法が用いられる

実際に起こり得ると話し手は考えている→will が使われている。

・ **in your place** 「もしあなたの立場なら」

if 節の代わりをしている

◎if を使わない仮定法②主語が仮定を表す

主語が仮定の意味を表す「~であれば」

一見 if 節のない普通の文に見えるが, would が用いられており,現在の事実と反する仮定を表している

◎if を使わない仮定法③不定詞・分詞構文で仮定を表す

To hear her speak, you would think she was from Tokyo.

Given the chance, I would study abroad.

・ 不定詞で仮定を表す

不定詞句の To hear her speak が仮定を表している

=If you heard her speak, you would think she was from Tokyo.

・分詞構文で仮定を表す

分詞構文の Given the chance が仮定を表している。文語的表現

= If I were given the chance, I would study abroad.

③given 「~ということを考えれば」→前置詞,接続詞的に用いられる→直説法

③suppose [supposing, provided, providing] (that)を使って if の意味を表すことができる。ただし, supposed という形はない

③if 節や if 節の代わりをする表現がない仮定法も多い

③Could I ~?などの助動詞の過去形も仮定法か

Could I ~?(許可を求める)や Could you ~?(依頼を表す)などの助動詞の過去形を使った表現も仮定法と考えることができます。

Could I ~?は、現在形の Can I ~?より丁寧な表現です could を使うとできないことを前提にしている。このように尋ねられたほうが相手は断りやすく、義務感が小さくなります。Can I ~?と Could I ~?には、「丁寧度」の違いがありますので,基本的には,相手との間柄に応じて使い分ける。

Can I ~?→家族や友人など親しい間柄で使われ,カジュアルな表現

Could I ~?→それほど親しくない間柄で使われ,控え目な表現

また, Could I ~?と尋ねられて,それに対して許可の返答をする場合,could ではなく, can を用いて答えましょう could で答えた場合、「もしかしただけでもできるかもしれないけど」というニュアンスを帯びて,許可を与えているのか与えていないのかがあいまいになるためです。

◎仮定法現在

提案・命令・要求・主張を表す動詞や,必要性や重要性を表す形容詞に続く that 節の中の動詞は原形。that 節以下の内容は「実際にはまだ行われていない」という仮定の内容になっている。

◎提案・命令・要求・主張を表す動詞を用いた仮定法現在

④that 節中の主語が he などの 3 人称単数であっても,動詞の原形を用いる。

仮定法現在が用いられる「提案,命令,要求,主張」を表す動詞

DRIPS めいかいいりょうしゅ

demand (~を要求する) order (~を命令する) recommend (~を勧める)

require (~を必要とする) insist (~を要求する) propose (~を提案する)

request (~を頼む) suggest (~を提案する)

◎必要性,重要性を表す形容詞を用いた仮定法現在

仮定法現在が用いられる「必要性,重要性」を表す形容詞

desirable (望ましい) important (重要である)

essential (不可欠である) necessary (必要である)

③that 以下を should +動詞の原形となることもある

◎仮定法を使った構文

1. If it were not for ~ 「もし~がなければ」

= without ~ = but for

仮定法過去完了の文では, if it had not been for ~になる

④肯定形の ×if it were for ~という表現はない。

2. if only 「…でさえあればなあ」

I wish で書きかえることができるが, if only のほうが強い願望を表す。

if only+仮定法過去完了→「(あの時)~でさえあったらなあ」

③主節が付いて「ただ~さえすれば」の意味で用いられることもある。

3. **It's time+仮定法過去** 「もう~してよいころだ」

to 不定詞を使ってほぼ同じ内容を表せる =**It's time for you to ~.**

仮定法の場合,不定詞と異なり,「(実際は違うが)そうになっているべきだ」というニュアンスから「遅すぎる」と相手を非難する意味合いを持つ。

③time の前に **about** を付けると「そろそろ~してもよいころだ」、

high を付けると「とっくに~する時間だ」という意味になる。

4. **as it were** 「いわば」

文の途中か文末に置く。 so to speak のほうがよく使われる

5. **would rather+仮定法過去** 「(むしろ)~してほしい」

would rather do 「(…するよりも)むしろ~したい」

would rather の後ろに節を続ける場合は仮定法過去が使われる。

形は過去形でも過去の意味ではないことに注意。